

平成30年5月1日発行（毎月1回1日発行）  
昭和49年6月17日第3種郵便物認可  
第46巻 第5号

# 陸

5月号

「陸」夏の三〇句 東京・千葉・埼玉編

左折して沼匂ひけり鯉のほり  
 母亡くて嘘一つ減るねぢり花  
 木つ端よりぼたぼた墮ちる蟻の国  
 星の爆発毒だみの花地に撒ける  
 ブラインドの透き間あいまい薄暑光  
 約款の字のこぼれでて夏瘦せる  
 抱しめるたびにまくなぎ固くなる  
 翳のごと黒ねこ八重葎より現るる  
 青葉騒湖底に沈む馬の耳  
 サンガラス何かひとりになつたよう  
 亀かさなり石になる日待つ白夜  
 グランドの白線眩し夏来る  
 青柿の渋くて固き父性かな  
 珊瑚めく薔薇の死木や蟻急ぐ  
 鉄砲水に万の蟻死す狭間かな

浅見 玲子  
 山本千代子  
 當山 孝道  
 岩崎 嘉子  
 永井アイ子  
 大石 雄鬼  
 瀬間 陽子  
 小竹ヒサ子  
 石川 信子  
 竹内 實昭  
 佐藤 禎子  
 大野和加子  
 渡部 洋一  
 十亀カツ子  
 上田 桜

抱卵も棄卵もピンク梅雨晴間  
 焼芽筍甘し津軽のまたぎ宿  
 沖繩忌サイダーの泡胸塞ぐ  
 梯子車の七階までも大西日  
 少年の凹みたる腹冷房車  
 思ふほど嵩なき今朝の花火殻  
 山小屋のたたみ一畳明易し  
 青空を千切れさすよに百日紅  
 試写会の暗がりに脱ぐ夏帽子  
 奈落まで届く熟演芒種なり  
 全身が夏の雲なるシヨールム  
 薫風や水面に亀の目の光  
 ガスタンク少しこごみて遠花火  
 水芭蕉山にピエタのごとくあり  
 吾も居て護憲派五万憲法記念日

小川 葉子  
 今田 克  
 石堂つね子  
 西牟田ふみ子  
 保坂 純子  
 鳥巢 有子  
 根岸三恵子  
 杉沢 信一  
 安住 正子  
 小橋めぐみ  
 三宅 桃子  
 松川 和子  
 吉川 孝子  
 俵 征市郎  
 平田 正枝

「陸」夏の30句（東京・千葉・埼玉編）	表 2
天 棚	中村 和弘 2
ざりざり	大石 雄鬼 32

### 追悼 金子兜太先生

詩は志の之くところ	中村 和弘 4
金子兜太先生特別講演より(「陸」平成21年6月号再録)	6
金子兜太の作品から「私の好きな一句」	小菅 白藤他 24

テーマを詠む「日本」	全55名 27
作品 I	小菅 白藤他 33
作品 II	及川 明子他 47
作品 III	西村 敏子他 54

### 特別寄稿

同人作品評 - 2月号 -	赤羽根めぐみ 30
同人作品評 (2月号)	田中 三桃 42
今月の秀句10句 (2月月評)	吉本のぶこ 44
陸路集鑑賞 (2月号)	大類 準一 52
陸路集巻頭作家特別作品「天動説」	三宅 桃子 58

陸路集	中村和弘選 60
	(駒木みどり・竹田晩成・平田正枝 他)

選後評	中村 和弘 67
-----	----------

各地俳句会動向	69
陸各地句会日程	57
陸東京句会案内	51
第42回現代俳句講座のご案内	41

金子兜太先生お別れ会のお知らせ	74
-----------------	----



天<sup>あま</sup>  
棚<sup>だな</sup>

中村和弘

草鳴りを土間にて聞きし端午かな  
厚き苔筋肉めきて比叡山  
鋭筆に嚙み痕しるき震災忌  
花吹雪渦巻き走る湖面かな

地獄谷の噴気に回り風車

腕に乗る春の蠅こそ我がピカソ

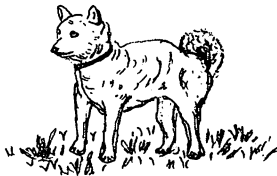
ソクラテスの墓に一ひとすじ条春燈

浮世絵の中に入りたる雨蛙

万年の地層より現れ杉花粉

天棚の牛の鈴より夏が来る

天棚の天井より吊した棚。



# 詩は志の之<sup>ゆ</sup>くところ

中村 和弘

「詩經國風」は昭和六十年発行の金子兜太の句集で、その発行当時から私が注目し目を拓かれた句集である。句集名が示すように中国の最古の詩集「詩經」をベースに想像を加え、新たな俳句世界へとチャレンジした稀有なる句集である。

そもそも「詩經」とは何か。ホメロスの詩とほぼ同時代学者によつてはそれ以前の中国の黎明の時代の古代歌謡の選集で世界最古とも言う。白川静氏によれば「歴史的な時期をもつていえば、中国における古代的な氏族の解体は西周の後期からはじまり、わが国では『万葉集』初期の時代がそれであろう。この二つの古代歌謡集にみられる本質的ともいふべき類同のうちにはおそらくこのような古代的氏族社会の崩壊という、社会的な事実に基づくものがあろう。かれらは、それまで祭祀共同体として絶対的なお

それをもつてつかえていた神々の呪縛から解放され、いまや歴史の世界に出たのである。人々ははじめてそこに自由をえた。感情は解放され、愛とかなしみとに身をふるわせることができた。新しく見出された自然は新鮮であり、人びとの感情は鮮烈であった。それは人間が歴史の上ではじめて経験する新生の時代であったといえよう」（角川書店刊「詩經・楚辭」の「古代歌謡の世界」で熟をもつて解説している。「詩經」は孔子によつて編まれた、と言うが定かではないようである。現存するものは三百五篇「風（國風）、百六十篇、「雅」百五篇、「頌」四十篇」である。

金子兜太が「詩經」に興味を持ったのは小林一茶によるとこの句集のあとがきに記されている。そして「読むほどに、ミイラ取りがミイラになってしまったのである。そして、私も『詩經國風』を俳句にしてみようとおもうようになった。理由は「國風」が北方黃土地帯の古代の民の（地方の歌）であり、その（ことばの大空間）に限りない魅力を覚えたということである。……私自身六十代半ばまできて、なんとなく酒渴感を覚えている語感を、むしろこれを機に大きく潤沢な語感に飛躍させたい、という願いもどこかにある」と述べているのが印象深い。

「國風」を題材にしての句の後に、日本の風土での句を反歌のようにしている。

一、周南、召南

麒麟の脚のごとき恵みよ夏の  
人抱けば熟れいて夭夭の桃肩に昂  
良き土に淑き女寝かす真昼かな

淑は善。女は未婚の女性（むすめ）。

流るるは求むるなりと悠う悠う

おびただしい蝗の羽だ寿ぐよ

そして、日本列島（七句）

人間に狐ぶつかる春の谷

雲も石もない山なり現存す

全部書ききれないので一部のみ、私の好きな句を抜き出した。

例えば（抱けば熟れいて……）の句は、当然桃夭（周南）をベースにしている。短い、婚に分類される詩である。

桃夭

桃之夭夭

灼灼其華

之子于歸

宜其室家

桃夭（周南）

桃の夭夭たる

灼灼たり其の華

之子子に帰ぐ

其の室家に宜しからん

この「桃夭」は、私などが例にあげるまでもなく、あまりにも有名な祝婚歌である。今でも愛唱されている。その意味は「桃の木は若々しく、花びらは赤々と輝く。この子がこうして帰いでゆけば、家庭はきつとうまくゆく」と言う素朴な歌謡である。三番まであり紙数の都合で一番のみにしたが冒頭の「桃の夭夭たる」のリフレインである。

当然ながら、嫁いでゆく若い娘を桃の花に喩えているのである。華やかでありながら素朴、生命感あふれる詩である。金子兜太の句は、この「桃夭」の生命感、豊かさを（肩に昂）で更に大きく自然の中に押し出し映像的に表現している。一種のモニタージュである。

「陸創立三十五周年」の講演をいただく折、先生に即座に句集「詩經國風」の周辺についてお話しを、とお願ひしたところ快諾していただいた。金子兜太作品の転機になった句集と感じていたからである。その折の講演をこの号に再度掲載したのはそんな訳である。

金子兜太先生は、現代俳句協会の会長そして名誉会長をつとめられ長きにわたりリードされた。そして先生の逝去された今年、私が現代俳句協会の会長の役割を担うことになった。とても先生ほどに出来る訳はない。力を尽くすのみである。

—陸創刊三十五周年記念—

## 金子兜太先生特別講演より

〔陸〕平成二十一年六月号より再録



どうも御紹介  
いただきました  
金子でございます  
。中村さんか  
らお話がありま  
してね、私は初  
め、田川飛旅子  
さんの思い出話  
をしようと、こ  
う思っておった  
んでございます  
けれども、中村  
さんから電話が  
ありまして、60  
歳代、後から調

べたら66歳でございましたけれども、66歳のときに「詩經國風」という句集を出しておると、変な名前の句集で、よくわからない人もいるんじゃないかと、意図がね、中国の「詩經」そのものはどなたも御存じなわけですけれども、意図がわからん、あんたと「詩經」というものとのかわりということ、一度しゃべる機会を提供したいと、だからちようどういいんじゃないかと思うから、今日しゃべらんかと、そういうふうな電話がありましたね、私も今ちようど中村さん、恥ずかしい紹介をしてくださったわけですが、ああいうことを前提に置いて、私に「詩經」ということについて、私が接触して、ああいう句集を出したということ、一度何かきつと意図があるんだろうと思うから、そのことをひとつありていに話してみんかと、そういうお気持ちだと思ひましてね、今まで私は全然あれには触れたことはないんです。もうあれは出しつ放しになつち



やったもんなんで、また、どなたからもそういうことを言われることなかつたんですが、さすが中村和弘、そういうところにちゃんと目をつけて、私のその魂胆を暴いていうというか、見定めてやろうというふうな気持ちだろうと思ひましてね、それなればこつちも言われた以上は応じざるを得ないということて来しました。

それから、せつかくその前に田川飛旅子さんのことを準備してましたのでね、私は田川さんについては随分句を書いております、その書いてあるものから幾つか抜き書きして、このことを御紹介しようと思つてきたんですから、それはもつたないないんで、「詩經國風」ばかりべらべらしゃべつたつてしょうがないので、残り時間で田川さんのことに結びつきたいと、こう思つています。

それで考えたら、ちようど田川さんの作風というのとすね、私が「詩經」という詩集でございますが、あれを相手に句作をやつたときの自分が最後に思つた気持ちと、よくこう重なるところがあるんですね、だからそのことをちよつと正直に申し上げてと思つております。

今日は地震がございましたね、熊谷あたりでも私が乗るときに既に新幹線が十分おくれれておりまして、それから上野まで来て、また前にこう詰まっておりますね、またこの調子じゃ東京駅で詰まるんだろうと思つたから、これはい

かんと思つて、急遽、秋葉原へ回りました、秋葉原からお茶の水へ来て、お茶の水から快速で来たなら、これは意外にびしゃつと来まして、あれは東京駅までのこのこ行つて、東京駅から乗つたら3時、4時ぐらになつたかもしれませんでございますな。そんな状態で、ちようどよかつたと思つております。それだけの判断ができるだけ、まだ私も若いところがあるなあと思つて、自信を持った次第でございますね。

エレベーターへ乗ろうと思つたら、大類つとむさんが出迎えてくれました、乗ろうと思つたら、ちようど岩手の方の盛岡の方の方がわつと来られて、間に合つたようですね。向こうはもうかなり長い間とまつていたんですよ、それから山形の方からも来れないんじゃないかなあ。そんな状態で、大類つとむさんだけ何だか知らないけれど、あれ幽霊みたいにやつてきちゃつたんで、あれはなかなか機敏な人だから、そういうことで気がきいてるんでございましてうかな。そんなわけでございまして、失礼しました。

まず「詩經」とは何だと、御存じとは思ふんですけれども、私のこれに取つつかれた理由から、まず申し上げた方がいいと思ふんですが、「詩經」という中国の詩集でございますね、日本の「記紀歌謡」より千年前ごろに出ている詩の本でございます。極東最古の詩集といわれておりまし

て、これを編纂した人は、例の孔子でございます。ちょうど向こうのヨーロッパのことに詳しい方だと、ホメロスがあの大散文詩を書きましたね、ホメロスの大散文詩の構想がで上がるころに、既に「詩經」が出ていたという、そういう形でございますね。ですから非常に古い詩集でございます。

それで、どんなもんかというですね、孔子がそのいろんな歌謡を集めたわけですが、時代は周の王朝、周王朝です。ですから古代ですね、中国の古代中の古代ですね、周王朝の栄えたときから次第に犬戎という異民族があらわれて追っ払われまして、周王朝崩壊の危機に瀕して逃げましてね、それで東周、東の周という国を新たにたつて、そこに辛うじて立てこもっていたという、全盛のころから、その東周時代までの歌謡を集めたんでございますね。

それで、その中身はどうかというと、民謡が中心でございます。黄河流域の、いわゆるあの黄土地帯の民衆の歌ですね、あれの歌を集めまして、それを「國風」と称したようですね。「詩經」というのは、その「國風」が中心でございますが、そのほかに歌謡を集めているわけです。どういふ歌謡かというと、宮廷で歌われたもの、それから先祖を供養するときに歌う歌、雅とか頌とか称しておりますが、國風と雅と頌とこの三つの種類のものをですね、三百余編

集めているわけで、その三つから成り立ちます。

それで、通俗的には「詩經國風」というふうには呼ばれておりますが、これはだから民謡集でございます。今日も民謡の大家の金子千待夫婦が来ているはずですが、これは秩父音頭というのを、これはやはり「詩經國風」の中に入る、孔子がいればね、確かこういうものを入れたと思いますね。黄河流域ですから、秩父とは関係ないわけですけども、黄河流域の民のものを集めています。

こういう詩集に、何で私が興味を持ったかということなんですが、私が、ちょうど66歳、この句集を出したんですが、その前の年の65歳ぐらいのときから、どうしてもこれはひとつ「詩經國風」と取り組んで、俳句をつくってみようと思ひ角川の俳句編集の人に話したらね、それはおもしろいじゃないかと、やれやれと言われまして、ずうつとつくり続けまして、それで一冊にまとめたんでございますが、何で興味を持ったかといいますとね、私があるところ小林一茶に大変に興味持っておったんでございます。

持ったのは、もうずっと前から持っておったんですけれども、40代後半ぐらいから私は一茶に取りつかれておりまして、この世の俳人では、もう一茶ほどの人はいないと、芭蕉なんていうものは大したものじゃないと、こう思ひ込んで、今でも多少その様に思っておりますね、やっぱり

一茶が一番だと思っておりますので、一茶のやることは、ちようど金魚のうんこみたいなもんですな、金魚のふんみたいなのに、一茶のけつについて歩いていきますから、一茶のやることは何でもやるわけであります。

一茶が41歳のときにですね、「詩經」の勉強をいたしまして、そして「詩經」のこの詩の言葉をちよいとこう前書きにしていますね、句をつくっているんです。これがちようど41歳1年間ですな、実にまめにやっているんですね。それでまた不思議に41歳のときの、彼はずっとこう日記風に自分の行動を毎日毎日メモするタイプでございまして、これは30代に西国の方へ旅行しております。修行のために歩いたんですが、もうその時期から始めております。ずうっと毎日毎日メモ風の日録をつけているわけですね。その日録がいろいろ名前をつけて、今残されているわけですが、その中に享和句帖という、享和3年、一茶41歳のときの1年間の句帖というのがあります、なぜか知らんけれど、それまではこう3年間ぐらいまとめてたりしてですね、それからその「享和句帖」の後は今度は文化年間に入るわけですが、彼は42歳になるわけですが、42歳以降は「文化句帖」というかなり長い時代ずっとまとめているんですけれどね、毎日毎日書いて書きとめたものを、そういうふうにまとめていくわけですから、そのときだけ享和3年41

歳、その1年間だけのものをまとめているんです。

それで、この1年間だけ彼が別にまとめたのかなあ、と思つて、興味を持つて読みましてね、いろんなことが気づきました、一つはちようど父親が、2年前の一茶39歳のときに亡くなっておりまして、それで御承知のように遺産相続がうまくいかななくて、結局、郷里にも帰れなくて、それで江戸へとまつて、彼は宗匠になっておりませんから、また一生なれなかつたわけですから、結局二流の宗匠ということになりましたが、二、三流でございまして、そうなりますと江戸で食えませんから、あの付近の地域、具体的には今日の千葉県といていいでしょうね、下総、今の葛飾方向ですか、利根川べり、ちようど千葉市あたりから利根川にかけてのあの地域でございまして、下総、それから下の方の木更津とか、千葉市から下、こつちの方が上総、それからさらにこう突端部にいつて安房、この三つのところ、そこをぐるぐるぐる回つて歩くような生活に入つた。ちようど40歳で入るわけですね。

もうやむを得ずそういう生活に入りますが、これは苦勞の多い生活でございまして、私はこれを俳諧セールスの旅といつて、俳句を売つて歩くわけですから、これは大変なもので、迎える側の方がそんなものは要らないといえばそれまでですからね。そういう全く薄汚い男が、そこで泊まり

込んでやるわけですから、こんなもの泊めておくのはいやだつていうのは、これは奥さんの通念ですらかな、奥さんがそんな者面倒見る気はとでもならんわけで、一茶の記録にも、女房殿がフグみたいな顔であらわれたなんて書いていますから、よほど奥さんから嫌がられていたんでありましような。ふくとのような顔であらわれたとかいつています。そういうぐあいでありましてね、非常に苦勞の多い生活に入った。その苦勞の多い生活に入った最初の年として見ていいわけですね。

ですから、彼としては並々ならぬ覚悟があつたんじゃないでしょうかね。これを持ち切つて、自分としては何とか宗匠になりたいと、そういう気持ちだつたと思います。そのために彼はその1年間というのは、特別な年と考えたんじゃないかと思うんですが、そういう覚悟があつた。

そして、その中に詩經講筵を聞くという言い方ですね、詩經講筵というのは、「詩經國風」、庶民の相手のものみですから、「詩經」のほかの小雅の方は、これはもうちよつと棚上げしておいて、大体町では國風がみんなに、カルチャーみたいなものができていましてね、そこで口述されておつたようです。それを講筵というんですね。講義の講と、「えん」はたけかんむりに延長の延と書く、「筵」というんですかな、だからこう掘つ建て小屋をつくりまして、江戸

の各所に、むしろを敷いて、その向こうに講師というのが1人いまして、今のカルチャーの先生みたいな人がいてそれでその「詩經國風」の話をするわけです。それを、みんながむしろへ座つて聞くわけですね。それちゃんと有料でやるわけですし、その興業主はそれで稼ぐわけですが、今のカルチャーと全く同じです。カルチャーのアイデアがそのまま、もう江戸のころあつたということですね。

その「詩經」の講筵に一茶が行つて、「詩經」のことを聞くというふうになんとメモしてあります。詩經講筵に行くとか、「詩經國風」を聞くとかいうふうには、ちよんちよんと書いてありますが、41歳の初めぐらいに、そういうメモがありまして、それからほとんどそうですね、3カ月ぐらひは詩經関係のことが出てこないんですが、それは勉強してたんでしょう。

そうしているうちに、この「詩經」の中のこの詩の言葉、大体ほとんどが四言、四つの字の四行詩です。一番素朴な形式だと学者が言っております。四つの言葉の四行、この四つの言葉の最初をですね、ちよつと前書きに書いては自分の句を書くと、そういう記録がずうつと頻発します。

もう中心は「詩經國風」を読んでは自分の句をつくるという、そういうことですね。

そして翌年の文化、42歳になりますと、記録がぱたつと

なくなつちゃうんです。もうほとんどまれに見るぐらいです。その國風の詩の言葉を書いては俳句をつくるという作業は、1年間だけでおしまい。これも私から見ると一茶らしいんでありますけれどね。かなりあれは要領のいい男でございますね、短気で要領のいいところがありますから、もうある程度までやったら、まあこれでいいと、それでやったということになれば、これも看板だと、このぐらゐに思つておつたかもしれません。

私にとつては非常にそれが興味がありまして、今も中村さんの御紹介のあつたように、私も私なりの一つの気持ちで戦後出發しておりまして、やはり何かまとまつた自分の勉強の対象というふうなものもちゃんとなければ、自分の思うことはできないから、自分の好きな一茶か「詩經國風」と取り組んで、自分のこれからの人生というのを考え重く見ておきたいと。それには自分も「詩經國風」というものと取り組んでみたいと、そう思うようになった。

それと、その「詩經國風」がさつき申したように、非常に重い詩集でございますからね、特に民謡集が國風ですから、私が民謡が大好きなせいもありますけれども、民謡集の集成を、中国古代の民謡集の集成というのを、しかも孔子が選んでいるという、これを自分も取り組んでみたいと、こう思うようになったんでございます。

ただ、それで今御紹介いたしますが、じゃあ一茶はどういう取り組み方をしたのかというのは、やつぱり私にとつては気になるわけですが、どうもね、あんまりはつきりした原則が、プリンシプルがないんですね。かなり気ままな感じでございます。例句を上げた方がいいかな、二つだけ目立ちましたのは、一つは、古代の民謡ですから、非常に猥雑なものもあれば、非常にユーモラスなものも多いわけでございます。そんなにまじめなものというのは余りないんです。しかも特にですね、周王朝の榮えていたところのこれは正風、國風の歌謡を正風と言つていますが、それから周王朝が崩れて逃げて衰えていく過程のものを變風と言つておりますが、この變風になりますとね、周王朝の親玉ばかりじゃなくて、いろんな家老が分かれて、自分でまた領主になりますね、各所で。小さな領主がたくさんいますけれども、そういう連中の都やなんかへ行つて住んでいますと、もうその領主がなつてないわけですが、みんな、いいかげんなことをして。だもんだからそれを皮肉つたりね、その世の中がどうもだめだ、だめだということを言つたりする、いわば何か皮肉っぽいユーモラスな詩が多いわけでございます。歌謡が多いわけでございますね。

一茶はそれが楽しみで、とにかく初めのころ出てくるのは、正風の、「しょう風」と言つてもいいんでしょうけれ

ども、ちよいちよい正風と言っているんだけど、正風の歌謡からじゃなくて、変風の歌謡、つまり「詩經國風」も中間から後に出てくる歌謡ですね、これを盛んに取り上げては、それに俳句を結びつけている。それで見ますと、彼が何を意図してそんなことをやったかといったら、そのいわばひねくれた時代の民衆がそれを大いに皮肉つたりして、あるいは投げやりになったりしている、そういう時代の民謡の調子というのは、今のように非常にユーモラスで皮肉っぽくて、猥雑な言葉が平気で書いてある。そういうものをそのまま自分の発想の源にしようとしているという形跡があります。

それは例えば時間がありませんから一つだけ、ちよつと例を申し上げてみますとね、こんなのがあるわけです。これは変風の中の衛という、周の家臣がたくさん分かれて、自分で小ぢやかな国つくっているわけですからね。もう周王朝の威信は及ばない、その中に衛という国があるわけですが、その衛の国の歌のことを「衛風」の歌と、こう言っているわけですね、衛風、衛の風というわけですが、衛風の中にですね、こういう歌謡があるわけです。

これは孔子さんがつけた題かどうかわかりません。一番信頼できるこの「詩經國風」の翻訳者というと、私のこれはもちろん知識で言っているんですけども、吉川幸次郎

さん、それと今一人は目加田誠さん、このお二方の訳したものが、一番私にとってはぴたりなんでございますけれどね、その吉川さんのつけた題じゃないかと思うんですけども、「有狐綏綏」という題なんです、わずか4言の4行ですから、読み上げますが、有狐綏綏というのはどういう意味かという、狐がある、狐がいると、有狐ですね、有狐。すいすい、綏綏というのはこれはくせものでございましてね、皆さんはすぐお察しがつく、よく民謡なんかでね、囃子にね、すいすい、というのがあるでしょう。私はその元がね、この言葉だと思っっているんです。ここから来ている。

これはね、吉川さんの解釈によると、狐というのは大体人間のことを言ったようですね、そういうもう変な時代ですから、人間がみんな狐みたいに見えたわけだ。乱世ですから。そしてそれがね、綏綏というとね、男女が2人並んでね、ゆつくり歩いていく様子が綏綏という、だから民謡なんかの後で出ますよね、すいすい、なんていうと、あら、えっさささ、すいすい、なんてやると、あれはそういう調子なんじゃないですか。男女でこう並んで歩いていく、すいすい、という歩くという、そういう題なんですかね。

有狐綏綏

在彼淇梁

心之憂矣

之子無裳

これは、この題があつたのかどうかわかりませんが、そういう題で、3編あるんですが、そのうちの一つにですね、狐あり、綏綏として、かの淇の川の橋にありと、心憂える、この子は裳なし、狐がいて、2人並んで、男女2人並んで、のつこりのつこり歩いている、淇の川つてありますね、淇の川に今2人は歩いてると。狐あり、綏綏として、淇の川の梁にあり、心憂える、それを見てると何だか心配だと。こういうことなんです。私はどうも心配だと、ということ、今ここにいる男の子は裳はかないでいると。だから綏綏の男女は目の前の風景なんです、それから淇の川の橋の上を2人でこう男女がゆつくり楽しそうに歩いている、それを見てると、どうもここにいる男の子が心配だと。これはお母さんの気持ちかな、この子を見ると裳はいてないと、こういうんです。男女わかたず裳をはくようになっていくわけで、裳をはかないというと、下着は余りしてないでしょうから、丸見えになる可能性があるあるわけでしょうけれどね、まさか丸見えでぶらぶら歩いていたわけじゃないと思うわけなんだわ。何かそんな風景

も出てくるぐらいでございませうがね、そういうんですよ。それが一つの民謡なんです。

それを孔子が選んだんですからね。孔子という人も結構おもしろい人だと思えますよ、私は。「狐あり、綏綏として、かの淇の川の梁にあり、心憂える、この子は裳なし」と、こういうんです。

これを受けましてね、一茶がこの有狐綏綏は彼氣に入っちゃつたんですな、この言葉が。それで、有狐綏綏という前書きのもとに、彼が書いている句があるんですね。その句は二つありましてね、すぐ書いて、またしばらくたってからまた書いているんですが、よほどこれが好きだったんじゃないかな。

一つの句はですね、

〈秋の夜の独身長屋むつまじき〉

というんです。秋の夜ですね、独身長屋というのはあつたようですね、江戸のころも。これは何か武家の足軽とかああいいう人たちのいたものなんかと思つたりするんですが、私よくわかりませんが、足軽長屋とは書かないで、独身長屋というんですからね、町中にもあつたんじゃないかなあ、今のようなマンションじゃないや、何というんだあれ、こう、何かこう一つの中に部屋がたくさんあつて、アパートよりもつとちつちやいようなやつがあるじゃないですか。

これは調べてみないといけません。

〈秋の夜の独身長屋むつまじき〉というんですね。だから秋の夜で、独身長屋を見たら、むつまじいって、独身長屋だから1人のはずなんです。それが2人いるわけだ。それが火影で見える、仲むつまじいなあと、有狐綏綏だなあと、こういうことでしょう。これ。「有狐綏綏」というのはこれだろうなあと、一茶は見ているわけですね。それだから裳のないのは今は自分だと、そのころはお金もなかったですからね。これをね、自分の身に引きつけて、〈秋の夜の独身長屋むつまじき〉という句にしているというところは、ちょっと私はしゃれておもしろいと思うんですね。それで、これはまさに「國風」の歌謡から発想源を得て、自分の句の発想の元につくついていると。

しかも、この綏綏が気に入っちゃいましたね、今一つしばらくしてつくついているのは、それは今度は自分のやつぱり、好きな女性も、もちろんそれは若いですからね、40代初め、いたわけでした、どうもその女性を句にしたと思うんですけれども、〈松陰に踊らぬ人の白さかな〉、これも綏綏と前書きがある。

〈松陰に踊らぬ人の白さかな〉、だから松陰にそつと立つて、踊りの輪を見ているんですね、自分は踊りの輪に入らずに、踊りの輪を見ている、そういう白い影が見える、

あの人じゃないかなあと、一茶が思っているんじゃないでしょうか。一茶はずうつと独身でございますから、52歳で結婚するまで独身生活ですから、好きな人が幾人かいたようで、私の調べでも3人ぐらいいますが、相手の女性からはちつとも好かれてなかったようですね。一茶はけん坊でございますからね、けちな男というのは余り女性から好かれませんか。これは女性がたくさんいるのに、そんなこと言うとおかしいようですが、どうもそれは真実だと思っね。だから片想いんですね、片想いの女性が松陰にこつそりと立っていると、踊りも踊らないで、寂しそうだという気持ちですか。

だから、これは「有狐綏綏」から来るとなると、かなりひねつているという感じがありますよね。その自分の気持ち、孤独な女性というものとの対応を書いているわけですから。ですからこんなひねり方もしているわけですね、とにかくこの発想源をこれに入れていっています。それが一つですね。これが中心。

それから、今一つ気づきますのは、おもしろい言葉をめつけてはですね、それで句をつくるという、全くその言葉あざりと申しましょうか、言葉だけを有効に「詩經」に求めていると、「國風」に求めているという傾向があります。その顕著な例として、一つだけこれも申し上げます。



羔裘如膏

日出有曜

豈不爾思

中心是悼

要するに何かてかてかてかしてあるんですな、羔裘は膏のごとし、この羔裘という意味をね、これ書いてくれればよかつたんだけれども、字から見ると、何か着ている着物のことのようにですね、裘という字の下に衣がついています。だから着ている着物が膏のごとと言うのは、こうてかてかてかしてあるわけですね、そして月いでて輝き、だから、お月様が出たらその自分の目の前にいる人の着物がてかてかてかてか光つたつていう、そういうことですね。あになれをおもわざらんや、心の中のこれを見たむ。要するにそれをてかてかてかしてあるのを見て、自分の心の意中の人のことを思っていると、だけど思えども通じずという、我が心がかなしいと、そんな詩のようですね。この月が出たら、自分の目の前の人の着ているものがてかてか光つたつていうのは、これはいかにもその民謡の印象でございませぬ。普通まともな人だったら、あんまりこんなことは言わないだろうと、私は思うんですけれどね。

それにまた一茶が大変興味持ったんですね。それでそれを見て、彼がつくつた句は、

〈夏山の膏ぎつたる月よ哉〉

月が出て、夏山がざらざらしていると。だから衣装じゃなくて夏山がざらざらしている、こういうふうに感覚に転嫁しているわけですね。

それで、これは発想の転嫁というより、むしろ膏ぎるといふ、この言葉が好きなんじゃないかな。月の光で膏ぎつた感覚、感じがあるという、膏ぎつているという、この感覚が一茶としては気に入っているという、そんな感じでございませぬね。膏ぎるつて、膏薬の膏です。あの人は膏ぎつた人だといふときに使いますね。だから要するに、月の光で夏の山が膏ぎつているといふとらえ方が、この言葉を借りてつくつたわけですが、得意だったんじゃないですかね。そんな調子でね、どうも発想と言葉と両方で彼は思うままにやつているという感じがいたしますね。

それで私の場合はどうかというと、それに刺激されて、だから私もやつてみようということ、さつき申したように興味を持ったわけですが、それも相手が「詩經國風」だから、相手に不足はないという気がありますからね、私なりでやつたんですが、私はどうしてもその言葉、後の方の膏ぎつたる式の、「詩經國風」の中の言葉を大いに自分の俳句に取り入れてね、それで俳句つくつてみたいと思ひました。発想については自分の発想でやればいいと、一茶の

ように発想のもとまで得る必要はないと、そう思いましてやりまして、一つだけやってみて、句があります。時間がないので駆け足で申し上げるしかありませんが、その句がですね、これは皆様方御承知のように、これはまだ正風の方の、周王朝の栄えたころの平和な時代の歌謡でございますが、こういうのがあります。

桃天という、これも吉川さんがつけた題でしょう、桃と天はこうあでやか、天天たりの天天、こういう天、おんなへんがついて普通こう書くでしょう、怪しげな魅力の女性のことを、いいですよ、いいですよ、そのおんなへんが、ないわけです。おんなへんのないこう天、もうお気づきでございます。それで桃天、桃がだから色っぽい、あでやかな、あでやかで色っぽいという詩ですね、そういう歌謡でございます。

桃之天天

灼灼其華

之子于歸

宜其室家

これも3編なんです、その2番目。桃が天天として、桃が今あだつぼくそこにあると、桃の木があだつぼくあり、まず、実が膨れ上がっていると、げにもその実がばあつとこうたつぷりとなっているわけです。膨らんで、膨らんで

なっているわけですね。歸るといふ字を書いておいて「嫁ぐ」と、嫁に行くと言ませるんですね。こういうのを日本人がこう読んでいるわけですから、あんまり当てにならないんですけれどね、この子ゆきとつがば、この家室によるしからん。そういう歌謡なんです。

桃があだつぼく、こう今、これはこの場合は実っているわけですね。その実っているその実の、げにも、驚くほどの膨れ上がった実がなっていると、ようようとして膨れあがったというのは、大変なものでございましょう、だからその大変な、これはもう魅力的な子がそこにいるわけですから、その魅力的な子を見て、この子がもしお嫁に行つたならば、その嫁に来た方の家は大変によろしからん、よろしからんというのはあいまいな言い方だけれど、要するに調和して和やかな家庭になるだろうと、そんなふうには吉川さんなんかは訳してますね。よろしからんというのをね。だからもう説明するまでもないわけでした、たつぷりした桃の実のような女の子がいて、これが嫁に行つたら、その行つた先も家も大変によろしいことになるんじゃないかと、非常にこう幸せになるんじゃないかと、そういう歌謡ですね。これは平和な時代だから、こんな歌謡ができたんですよ。

それで、この中でね、私はこの桃の実がたつぷりとして

天天（ようよう）としているという、この言葉が好きです。ね、この天天という言葉を使って、一つ句をつくってやろうと、思いまして、これを読んだときに。それでこういう句をつくりました。

〈抱けば熟れて天天の桃肩に昴〉

というんですね。その天天の桃を抱いたわけです。これがねらい目です。抱けば熟れて、熟れている、実際はまだこれから嫁さんですから、熟れるという感じじゃないんですけれど。抱けば熟れて天天の桃、桃のようなこうあてやかな、この今女性を抱いていると、そしてひよいと気づくと、昴が出て、その女性の肩の辺にこう光っていると、ね、ますます祝福している感じだという句でございまして、これは大変に私としては得意な句でございまして。「詩經國風」の方でも、もうトップに近いところに置いているのでございましてね、割合に評判もよかったです、この句は。この歌謡のこの言葉を知っている方も多かったようです。この「詩經國風」、あれだなあと言ってくれる人もいました。天天の桃なんというのは、これは有名な言葉じゃないですか。それでつくったんです。

ところがね、しばらくたちますと、ふっと一茶に気づいたんです。そうしたら一茶がね、「天天」という前書きのもとにね、句にしているんですね。その句に実は私がまい

ったんですね。それはどういう句つくっているかといいたすとね、

〈不相応の娘もちけり桃の花〉

とこういうんです。どうも自分にとって不相応な娘、つまりだから自分のような二、三流俳諧師の変な男、しかもすけべでね、ろくに仕事もしない変な男、この男にしちゃ不相応な娘ができちゃったと、実際は死んでしまふんですけれどね。だから娘はいなくて、実は死んだ後でできた子が娘さんでしたな、それは今でもその子孫が残っているわけですが。とにかくいなかったんですが、彼は想像したわけでしょう、この詩から。天天の桃の女性から、自分としてこんな女の子がいたら、自分にとっては不相応だと、こう思うわけでしょう。それで今桃の花を見て、こんなおれの身に不相応のような女性がいたら、いたらっていうことなんだらうな、桃の花が咲いていて、不相応の娘もちけりと、こう言っているんですから、その桃の花を見て、「詩經」のこの詩を思い出して、そして、ふとそんなすごい天天たる女性が自分の娘にいたら、これはあんまり自分にとって不相応なことなんで、どうしていいかわからなくなる、おれにとっちゃこういう女性は困ると、こういう娘は困るといふぐらいの気持ちかな、とにかく自分にはこれは大変に不相応な娘のことを、今「詩經國風」は書いておると、

そういうことなのかなあ、よくわかりませんが、要するにそのうんと謳歌してですね、天天の桃のような女性を謳歌して「詩經」も書き、私もそれをそのまま受けて句にしているのに、一茶先生はそこから逆にひねって、そんな娘が自分にあつたら、これは不相応な話で、かえって困っちゃうと、こう書いている、そのひねり方ね、その逆転のさせ方、だれもがいいな、いいな、いいなあと言っていることに対して、ひょいっとあらわれてきて、あんなのつまんないよと、こう言ってみせる、このやり方、このやり方が私は気に入っちゃったんですね。気に入ったと同時に驚きまして、このすばらしい詩句とおれの句があるのかかわらず、一茶がこんなひねり方をしてね、みんなの喜びを逆転させようとしているという、この魂胆が気に入らないというか、こいつはただもんじゃねえと、もつと言え「詩經國風」なんて、このあらたかな詩集をね、こんなふうに扱えるだけの度胸というものは大したものだと、こう私は思ってたんですね。

そこから考えましたのはね、どうも結局私が「詩經」の言葉というもので句をつくらうとした、その魂胆の中にね、非常に安易なものがあつた。要するにただ言葉だけを借りてきて、古い言葉でおもしろいから、中国の言葉ですからね、おもしろいから、それだけの安易なものがあつてね、

一茶のように、もつと何か腹の据わつたものがなかつたという、じゃあ一茶の腹の座つたものつて何だろうと思つたら、この句にあるように、だれもがいいとするものに対して、逆転の劇を演じてみせるという、その度胸というのはどこから来るのかというね、これが「詩經國風」のつくつてきた、つまりあの民謡をつくり出してきた黄河流域の黄土民族の民衆の心情ではなかつたのかなあと。

特に周王朝栄えるころはいいが、その後の変風の時期に入つたら随分苦勞しているわけですからね、大変に世の中乱れて。そういう時代の中に生まれてきた歌謡ですからね、その國風の歌謡一つ一つにですね、そういう恨みつらみの思いが染みこんでいる。それから汗にまみれて働いている、その民の生活のにおいが伝わっている。言葉にすれば染みている、まともな言葉で書いているものの奥に反語が含まれている、そういう生活の中に民衆はいた、そういうですね、ちょうどその時代の民衆の心と、それから暮らしている黄土地帯風土というものと、それを一茶はね、あれは信濃の、奥信濃の男で、農家の出ですから、おのずからわかつたところがあるでしょうね。體質的にも似たところあるんでしょうけれども、それを彼がわかつた。一言で言えば、民の持つている暮らしのにおいと苦しみというものが彼にはわかつていた。わかつたんで、よけい「詩經國風」を自

分のモデルにしようと思ひ立つてやっている面があつたんだと、私は気づきましたのはね、これは私みたいにいかにげんに一茶をやっているから、まず言葉を借りていゝんなものを作ってみようなんていって、〈天天の桃肩に昂〉なんてやつてたんじゃあ、これはだめだ。

だからやつてから自分で気づきましたね。だけど、もう途中まで来たんだから出しちゃえと思つて、それでごまかしに万葉集の長歌の後にこう返歌を出すようにですね、自分の句を後へ「詩經國風」を借りてつくつた自分の俳句の一群の、その後へ自分のこの日本列島でつくつた句を、これはじかに触れてつくつた句をひよいつと置くと。また、「詩經國風」から借りてつくつた句を置く、また自分のやつ、こういうことをやりました。返歌というのをやつたんですけれどね、それでやつとつじつまを合わせようとしたんだけれど、余り評判よくなかつたですな。

だから中村さんが見てて、何やっているんじゃないかと思つたんじゃないかなあ。何か言葉遊びばかりやつてて、その後へ自分の句か何かね、返歌みたいな形で変なことをやっているといつて、彼としては非常に怪訝に思つていたんじゃないかと思ひます。それが私にしゃべれという理由だと、こう思ひます。

だから、私はしみじみそれでね、これは氣取つたことを

言うようですがね、そのときからなんですが、構造主義とかの考え方、二十世紀の中心的思想だと言われていますが、構造主義創始者のソシュールとかいう人がいましたですな、あの方の意見だという話で聞いているんですが、言葉というものは、物があつてね、言葉が後から出てきたんじゃない。つまりこのレットテルをつくるために、物についてのレットテルとしてね、言葉が後からつくられたんじゃないんだ。言葉があつて物が生まれたんだという意見、私はそういうふうには理解しているんですけれどね、そういうことを彼は言っているんですね。我々の常識を覆しているわけです。

だから物があつて言葉がきたんじゃないなくて、それに名前がついたんじゃないなくて、言葉があつてものが生まれた、だからガラス、コップという言葉があつて、コップが認識されるといふことすな。コップと言われて初めて存在する、自分にとって存在する。そういうもんなんだという、これは私はかなりね、真理をついているといふかな、かなりなんて言うとおん殴られるかもしれませんが、これかなかね、教えられるところが多いんでございますね。言葉があつて物が生まれたという、この考え方。

それをだからしばらく信用してたんです。なるほど、言葉というのはいふものなんだと、言葉がオールマイテ

イーと言つていいんだと、そう思ったから、私もその「詩經國風」の言葉なんていうのを使つてやつてみようよと、思つたわけですけども、どうもね、この一茶がね、こんな変なね、ひねくつた逆転させるような句をつくる、一つの言葉に対して逆転した発想を持つて臨むというふうな、これを見たときにね、やつぱり黄河の民と一茶の体質の中に似たものがあつて、しかも一茶はそれを極力理解しようとして、この「國風」を読み、それを句にしている面がある。

と。  
そこからね、物の方がやつぱり大事だと、その言葉を支えている物の方が大事なんじゃないかというふうな、その後から私は思うようになったんです。だから、確かに物というのは言葉があつて生まれたことは間違いないだろう、そういうふうな考え方でとらえることはできる。できるけれども、そういうふうにして成立した言葉と物とは関係はどうかといえ、物が生々しくぐりぐり、生きてないと言葉は死んじまう、そういうふうな思うようになりました。だからやつぱり物が優先だと。物が優先だと、物が先立つて言葉が生きていける。もちろん初めは言葉があつたけれども、その物が死んじまつたら言葉も死んじまう。極端に言へばそう言える、そう思いましたらね、このあたりからは、私の頭の中には、やはりくどいような話ですけども、

確かに言葉があつて物が生まれたということも真実だが、その言葉を生かすのには、物が生きていなければだめなんだと、だから物がぐりぐりぐり生きて動くような、そういうもんでなければだめなんだと、だから物を忘れた言葉の扱いなんていうのは、これは退廃に通ずると、言葉自身がだめになる。

おまえの「詩經國風」のトライアルは、実験は、そういう失敗の例なんだというふうな、自分で自分に言い聞かせようになつちやつたんですよ。だからためえの句集を失敗だなんて言うのはしゃくにさわるから言わないですけれども、それで私はこの句集についてはしばらく語らないで来ているんですけどね。むしろ私はこの句集を書くことによつて教わつたですね、そのことを。全くくどくて失礼ですが、確かに言葉があつて物が生まれるんだ、これは間違いない。けれども言葉を生かすも殺すも決めるのは物なんだと、だから物が生きていなきゃだめだ、これは間違いないと思うな。

それ以来私はそう思い込んで、物の大事さということを強調してきているんですけどね。だから言葉ばかり言う人に対しては、軽蔑的な目を持つて見ているわけでございます。物というものが大事だと。そこから私は、例えば自分が育つた秩父なんていうのを産土とこう思

って、産土という秩父の風土を大事にせにゃいかんと、そういうふうな思いになってきているんです。

だから金子千侍がやっている秩父音頭なんていうものも、初めは私はどうでもいいもんだと思っただけでも、そのあたりからやっぱこれは大事にせにゃいかんと、そう思うようになったんですね。それについては、やっぱ秩父音頭のもっと昔の形というものも大事にしろいたい、そう思うようになった。そこに民衆の生活の姿があると。

そのことを田川飛旅子に結びつけさせてもらいますとね、まさに戦後俳句20年と私は言うんですが、戦争に負けてから大体昭和40年、20年に負けて40年ですね、この20年間、ちょうどその中に60年安保という文化反動の時期がありましたけれども、その20年間の間にですね、いわゆる戦後俳句と今言われている大きなこの俳句づくりが行われてきたわけでございますね。これは運動と言うのはおこがましいんで、別に運動の形をとったわけじゃないが、みんなおのずから同じような思考を持って、あの戦後の時代の中の俳句をつくってきたわけですね。これは総括して戦後俳句と言われております。私なんかも特にそう言っておりますが。この戦後俳句の時期にですね、いわゆる前衛などと言われた連中もおりまして、かくいう私ごときものとか、あるいは高柳重信というような人のこと、そういうような人

ちはいわゆる一時前衛なんて言われた時期もあります。思うままに自分の主観を振るって、自分の思うままにこの現実を受けとめて、思うままに書ききると、創造力を振るっていくという、そういう自由のスタイルで書いた連中のわけですけども、一言で言えば自己表現と申しませうか、自己表現を恣にしたと、こう申し上げていいと思いますが、戦後俳句のやっぱ中心というのはですね、そういう戦後の現実に対して自己表現を恣にした連中の俳句の集まりと、そう私は受け取っています。

ところが、その中でもいろんなタイプがありましたね、田川飛旅子もそのうちの戦後俳句の担い手の一人であることは、もう間違いないわけですが、その田川さんの場合なんかはね、自己表現を恣にするといったときに、それはさっきの言葉と物の関係じゃないけれど、言葉を先に立てて、言葉だけで勝負してしまうという傾向に陥りがちですね。それを一番強調したのは高柳重信なんです。それに対して私たちは、いわゆる社会派と言われた連中は、社会現実というものが大事だと、そっちの方を中心にしたいというふうに言っていたわけですけども、とにかく恣に書ききろうと、こうしておった。

その中で田川飛旅子さんの句をですね、皆さん方御承知でしょうけれど、幾つか上げてみますとね、彼の場合はそ

の言葉だけに走り、のめり込んで、自己表現を言葉によって恣に行うというふうな傾向を拒絶していたということな  
んです。むしろ戦後の現実という物を大事にしている。  
それも現実というのをですね、抽象的に、あるいは観念的  
にとらえるんじゃないくて、現実という物としてとらえる、  
そういう傾向にあった人だと思えますね。これが非常に貴  
重な存在だと私は思っておるわけでございます。それが今  
の「詩經國風」からの私の反省に通ずるわけですからね。

例えば、こういう句を田川さんつくっていますね、まず  
その基本の素朴な彼の資質のあらわれというのほもちろん  
あるわけでして、それが戦争中につくった句で、こういう  
句があるんですね、非常に立派な海軍技術士官でした。奥  
さんと結婚したばかりで、信子夫人と楸原居にあらわれて、  
私なんかがいると、夫婦で出現したときの、ああこんな立  
派な寒雷の俳人もいるんだなあと、思ってたね、とてもおれは  
これはかなわんかしれんなあと、思ったことがあります  
ね。もうこんな立派な人にはとても太刀打ちできないと、  
しかも、生意気にももう結婚してね、大学出たのは私より  
2年ぐらい上のだけのことですからね、随分生意気な人だ  
と思っただけですけれども。

それだからね、そのころの彼の句にですね、  
(全速航帽の顎紐梅雨したたる)

帽子を、かぶっているわけですね。それでこのあごひも  
して、吹き飛ばされないようにしているわけですが、そこ  
へ梅雨時ですから、雨が当たると、そのあごひもに雨がた  
まる、したたる、なんていう句をつくってしまいましたね、こ  
れは非常に寒雷で評判でございましてね、当時。それでも  
う田川飛旅子という、ああ、全速航、だなあと、こう言  
っていたんですがね。このかつきりとリアルですよ、つ  
まり事柄を物としてつかんでいるんですね。観念の色を交  
えない、この事柄をものとして包む、現実を物としてとら  
えるという、この姿勢が、もう田川さんのもう若いころか  
らの真骨頂でございましてね、それが一生貫かれたとい  
うことかな。

だもんでございますから、戦後間もなくつくった句で、  
私はこれは今日の俳句という本でも鑑賞させてもらった句  
なんです、

(犬交る街へ向けたり眼の模型)

という句がありますがね。横浜の職場に東京から通って  
おられたころの、京浜地帯ですか、あそこでつくったやつで  
しょう。犬が交尾している、犬交る、街へ向けたり、街の  
風景がそういうのが何か突出しているような街だとい  
うことでしょうか。そこに眼の模型が置いてある、眼鏡屋でし  
ようかどこか、あるいは医療器具を売っているような店



しょうか、そういうところに眼の模型がある、あの眼の模型のぐりつとしたあの血走った眼があつて、向こうの方で犬が交尾している、そういう殺伐たる戦後の街というのが出てくるわけですが、その中に彼の場合は自分の詠嘆も主観も出さないですね、物だけをびしつと書いています。物として書きとめてある。

この物としてきちつと押さえた上で現実を見ている、この乾いた目というかな、これは科学者の目といつてもいいでしょう、彼は科学者です、これは非常に今に思うと貴重でございますね。そして、いわゆる前衛なんて言われた私とか高柳なんていうのは、その言葉は、私は言葉遊びはしないけれども、でも結果的にはそうなので、要するに自己表現を中心に考えていますから、言いたいことを言つて、あらえつさあでやつておつた。もういいかげんな、いわばおつちよこちよいな俳句をつくつておつた。

田川さんだけがじくつと構えてね、それで信子夫人と一緒にになつて、我々をにらんでおつたと、あいつらしやうのねえ野郎だと、そういうふうにならんでおつたと、今にしてそう思いますな。この時期の句はなかなかみんなね、そういう句です。もう現実をすべてのものを物として押さええている、きちつと。基本的な。

〈ピーマンの青き拳や核戦争〉

核戦争を見て、ピーマンの青き拳に核戦争の恐怖を感じず、これなんかもするどいですね、物をきちつと押さええていますから、感覚が冴えてきます。それから、

〈踊りの輪ちぢんだ処にて手をうつ〉

これは素朴な句ですが、要するに物として見ているんですよ。これがですね、今になるとますますま怖い感じがしますね。

もう何か、私は自己表現の時期というのは去つていりやうな、自分でもそういう気がしておりますのでね、よけいこう何か沈静して物に即してやらにやいかんと、言葉が物を生むんだけれども、物が死んだら言葉も死んでしまふという、常に物が生き生きとしていなくなつたら言葉も死ぬという、あのときの自分ですね、66歳のときに得た考え方というの、今になってまた改めて思われます。特に田川さんの話をしろと言われて、田川さんを選んだときに、よけいに田川さんの句からそれを教えられる思いがあるということでございます。

何だかわけわからないんですけれども、自分じゃわかつたつもりでしゃべつておりますので、これで御勘弁いただきますと思います。どうも失礼しました。

(紙幅の関係上一部割愛しまとめさせていただきました。文責中村和

弘)

# 金子兜太の作品から「私の好きな一句」

小菅 白藤

## 酒止めようかどの本能と遊ぼうか

突如逝かれてしまった金子兜太氏、突如とどうしても申したかったのは、昨年十一月の帝国ホテルにおいて開催された現代俳句協会七十周年記念祝賀大会会場で念願の同氏と、お帰りになられる真際にお会いし両手で握手しながら「お互に更に更に長寿を目指し頑張りましょう」と誓い合ってお別れしてから僅か三ヶ月のご逝去で誠に残念でならない。同氏らしいお見事な旅立ちである。深く深くご冥福をお祈りする。

本論の「私の好きな一句」に入るが、同氏の数限りない名句の中から敢えて掲句を頂くことにした。

同氏提唱の伝統の枠にこだわらない自由奔放な、そして幅広い、深み、俳諧味たっぷりの独特の発想、表現の全く無季等気にならない好きな一句で、句の背後にいつもの兜太氏が控えているような思いさえする作品である。

大類つとむ

## 毛越寺飯に蠅来る嬉しさよ

中学二年の時、某の出版社が刊行していた「月刊 中二コース」の俳句欄選者が父の句兄金子兜太先生であった。そこで拙句「つくしんぼ木の芽つんつん四月が来る」が特選第一席を頂いた。以後「ジュニア！」と呼ばれて長くまざまに誼くして頂いた。ことに尾花沢にお招きした夜のおくのほそ道についての歓談の興味深さと面白さといったらなかつた。先生の龐大な句群の中から一句をといたのは甚だ酷な注文だが、敢えてその夜の思い出と共にこの一句にしよう。トラック鳥や社会性や造形やアミニズムそして反戦。先生のさまざまな風景と時間が、極楽浄土を模したとされる広大な伽藍を眼裏に構築しながら、純白の飯に遊ぶ一黒点の蠅に絞り込まれる。自然賛歌は人間を含めたあらゆる生き物の賛歌でもある。「谷に鯉もみあふ夜の歓喜かな」の「歓喜」とこの「嬉しさよ」は、決して忘れてはならない深く刻みつづけるべき息遣いである。

夜を走る都市のひかりの弟たち

この句は、私が兜太さんから戴いた短冊に書かれた一句である。戴いたのは随分昔で、私が学生の時だから、昭和三十五年頃と思う。この頃、東京武蔵境の沢木欣一さんのお宅によく伺っていた。兜太さんが、神戸から東京に戻られた頃かと思うが、ある日、沢木さん宅でお目にかかり、短冊はそんなときに戴いたものである。その折、どんな話をし、どのような経緯で書いていただくなったのかはほとんど覚えてない。

以来、何十回となく転宅をしたが、この短冊は、何時も必ず、部屋の何処かに下げてあり、現在も寝室の壁に飾つてある。

この度、句集の中にこの句を探そうと、書架から、古びて赤茶化してきた「金子兜太句集」（昭和三十六年刊、風発行所）を繰ったが、掲句を見つけることはできなかった。

この短冊には兜太さんらしく、太くて元氣のよい墨字が黒々と書かれている。

短冊を戴いて暫く後、社会に出た私をいつも励ましてくれた一句である。

台掌

夏の山国母いてわれを与太と言う

兜太先生の根強い郷土愛と母への思慕を感じます。父親の医業を継がず俳句の道を選んだ息子を誇つての「与太」だったのですが、後には息子を愛し信じた呼び名に変わったのでしょうか。

「陸」の大会や仙台で、度々先生にお目にかかりました。が、私は忽ち兜太ファンになりました。

数年前、御住まいの熊谷が記録的な猛暑と報じられた時思わず「夏負けなざるな与太の名の兜太先生 真規子」とヘンチクリンな句を詠み、句会に出したことがあります。勿論零点でしたが、私には懐かしい句です。

「母が亡くなる二カ月前に逢いに行つた時、与太が来たね、与太が来たね、バンザイと喜んだ。死ぬまで母は私を与太と呼んでいた」と先生著「他界」にあります。

骨太な秩父の風土に根ざした精神と、心の中のご母堂の存在が兜太先生の俳句の原点に思えます。昨秋、現俳の大会の折、帝国ホテルで歌われた秩父音頭を懐かしく思い出しつつご冥福をお祈りします

反核の兜太の太字梅開く 真規子

中村 仿湖

## 河より掛け声さすらいの終わるその日

掲句は「海程」四月号に掲載された、遺作九句の中の一句。九句の中に「さすらい」の句が四句ある。「さすらい」の終わるその日」を自覚していたのであるうかと、胸を打たれた。声を掛けたのは誰であったのか。父母、妻、弟、産土の地の祖霊たち、あるいは「おおかみ」であったのか。トラツク島で非業の死を遂げた戦友たちの魂であったのか。私は、掲句を兜大師の辞世の句として読んだ。

兜大師の「さすらい」は、故郷秩父を去った時から始まった。水戸へ、東京へ、海軍主計中尉として赴任したトラツク島へ。そして、トラツク島から引き揚げる時の一句。

水脈の果炎天の墓碑を置きて去る

この時「非業の死」を背負って生きる覚悟を決意した。身は安住しても精神は「漂白」していなければならぬ。それが「定住漂白」であろう。そうでなければ、抵抗の精神を貫くことはできない。「荒凡夫」は自由で抵抗の精神を貫くためのモデルであった。「さすらいを終わるその日」が、金子兜大の戦後を終わる日であった。

泉 風信子

## 人体冷えて東北白い花盛り

著書「語る兜太」(岩波書店刊)に、萬緑の成田千空氏(一九二一〜二〇〇七)を津軽に訪ねたことに触れた一文がある。昭和三十九年、東京オリンピック当時という。堀葦男夫妻と一緒に弘前から市浦・十三潟に足を伸ばして宿泊、東北を南下している。掲句はその時の一句で第三句集「婉婉」(昭和四十三年刊)に所収された代表句。(白い花盛り)は桜とも花りんごとも思えるが、冷えびえとした体感の中で荒々しい風土と美感を掴み取った迫力が伝わってくる。あとがきにも「自分の肉体で承知した自然より信用しない」とある。

俳句革新に走り続けていた兜大師の表現の平明さと転換に注目したい一句でもある。千空氏はその頃、(野は北へ牛ほどの藁焼き焦がし)と詠み、兜大師は「この荒々しさには、まぎれもなく東北がある」と鑑賞文を寄せている。兜大師は、自分の肉体もまた自然の一つと考えていたのだろう。

日本

油虫またぞろ日本の隙間より 青森 泉 風信子

八甲田を小さくしたり掛大根 青森 牧 ひろし

日本は瑞穂の国よ青田風 青森 阿保 子星

草朧フラットのの中日本生く 青森 木村 詩織

につぼんの花の帝の遍くや 青森 田中 三桃

落椿テレビの中の戦後かな 青森 小田桐妙女

日本の核にかこまれながら春 岩手 小菅 白藤

春嵐正答欄の無い日本 岩手 高橋 時子

列島を一と月かけて花まつり 岩手 多摩川 州

日本の背梁光る芽吹きかな 岩手 吉見 弘子

十二月八日の朝の耳掃除 山形 大類つとむ

サクラサクラ小國民と呼ばれし日 山形 堀 尚子

梅雨晴間日本列島胎児の図 東京 當山 孝道

鳥肌立てて陽炎がやつてくる 東京 大石 雄鬼

ヒロシマのハグを凝視す雲の峰 東京 渡部 洋一

乙鳥来るこの秋津島あるかぎり 東京 秋元 道子

桜東風廃炉へ白き防護服 東京 十亀カツ子

日本の非核どこまで菜の花咲く 東京 上田 桜

日本犬巻尾伸ばせば花朧 東京 小川 葉子

天平や倭佛もみづる太子寺 東京 今田 克

なまはげや日本に縄文生きてをり 東京 萩原 君子

戦をば否み日本の初陽かな 東京 俵 征市郎

心中に日本の色桜守 東京 吉川 孝子

日本出て花の様子を尋ねらる 東京 松川 和子

全国の震災遺児に桜咲く 東京 根岸三恵子

白の蘭雨降る日本に根を張る 東京 菊地 雅子

石鯨玉犬より半身とりもどす 東京 三宅 桃子

ジパングを花柄の風姫孤り 東京 瀬間 ろ敏

山水の美しき郷米みのる 東京 大塚みづゑ

ふくしまのおまんがどきの櫻かな 東京 安住 正子

うぐいすややまとことばのひらひらす 千葉 佐藤 禎子

竜天に海より分かつ領一つ 千葉 森井美恵子

蠶るややまとことばは母の聲 神奈川 加藤 明虫

花筵よくぞ日本に生まれけり 神奈川 岩本 宣善

日本国憲法誇り花の冷え 神奈川 小木曾あや子

基地の柵こえて異境や葛の花 神奈川 土岐 詳恵

初茜待つ人々や土地の富士 神奈川 田中 眞青

春場所や地球儀の文字細かすぎ 神奈川 三宅 不遜

ニッポンは水の国なり小鳥来る 神奈川 河重 卓三

甲武信の春日本武尊の跡たどる 山梨 温井 幸子

日出づる国の日浴びて百千鳥 神奈川 猪狩 鳳保

亀鳴くや昭和銀座のシャッター街 愛知 北原 千枝

千し薇土偶の臀の太きこと 神奈川 小川 七穂

着脹れてスマホの林抜けにけり 愛知 山田和歌子

江ノ島に智恵子の空と五月富士 神奈川 藤倉 頼江

初に見し国境冬の海にあり 三重 藤川 夕海

風を透き日本の燕になりけり 神奈川 加藤 浩二

ゆりかごの国を揺さぶる春疾風 三重 正木かおる

団塊に生きて憲法記念の日 神奈川 駒木みどり

大和国原われも若葉の冷えに立ち 滋賀 吉本のおこ

国難の歴史緋く春の鳥 神奈川 志和 雅代

花の昼「日本沈没」読み耽る 大阪 富田 栄子

日本丸帆を上げ煌と春の航 神奈川 伊藤 岳栄

大空襲に色変へぬ松生きてをり 兵庫 杉山 鮎水

ミサイルの飛ばぬ日本の初御空 神奈川 永井 良和

特別寄稿

同人作品評（二月号 主宰・作品Iより）

赤羽根めぐみ

暗礁の姿もうねる初日かな

中村 和弘

新年を迎え、めでたさを謳わんと、皆が元旦の昇る朝日を待ち構えているなか、ひとり岩のように沈潜する作者。日の出前、ただ闇を握っているかのような海は作者の心を映すものでもあるのだろうか、「初日」までの隔たりの大きさに愕然とする。「朝の来ない夜は無い」とよく言うが、暗い場所ですれだけのうねりが繰り返されて、我々の頭上に朝日が産み落とされるのか。暗い部分を凝視し続ける描写から、一転して「初日かな」で視線がぐっと上がり、作者の新しい年への思いと潔さが力強く伝わってきた。

軍艦の煮られしやうに初日受く

大石 雄鬼

大晦日の夜から元旦へと切り変わる時間の海の間に、闇よりも黒く不気味な軍艦の存在感。夜が明けてきて、全てが露わになったとき、光の加減だろうか、揺らいでいるかのような軍艦を目にしたと想像した。敵かで侵すことなどできそうにない鉄の塊が「煮られしやうに」とは異様な景である。己の中にある絶対的で強く大きいものが揺らぐこ

とに気付いてしまったとき、その動揺を収めて、「初日受く」と静かに言えるだろうかと自問しつつ読んだ。

冬鳥の影毀れそう陽のま中  
寒雀一瞬つぶれてから眠る

永井アイ子  
瀬間 陽子

冬鳥たちは冬の厳しい環境で生き抜くために、気を張って、凄まじい気迫で暮らしていると思う。そんな日々の中で、わずかに緊張を解くのは日溜まりや温かいねぐらである。「影毀れそう」「一瞬つぶれてから」に、こわれるぎりぎりまで頑張っている小さな命への丁寧な視線を感じた。

焦燥の胸の寒鴉の動かざり

吉本のぶこ

「焦燥の胸」と「寒鴉」を別の景として読みたいのだが、「寒鴉」は「焦燥の胸」の中にいる不思議な句。「寒鴉」は「焦燥の胸」を枯園か何かだと思って飛んで来て何か変だなあと思っているし、作者は動かない「寒鴉」の処遇に困っている。招いたのか訪ねてきたのか、両者に言い分がありそうで、色々と想像をかき立てられる。



千葉の本めくり初夢だとおもふ

瀬間 陽子

「千葉の本」というざっくりした言い方に、まず驚いた。正式な書名が長かったり難しかったりするならば、略してそんな呼び方をすることもあるだろうが。そして、本の話をしていと思ったたら、次は唐突に「初夢だとおもふ」とでも、そもそも夢とは辻褃の合わないことの連続だったりする。目が覚めて忘れてしまっただけで、夢の中では「千葉の本」以外にも、なんか変だなあいう出来事は山ほどありそう。そんな不思議くしの一句だが、ほっこりとしたたかひのは、「初夢」という季語の力だろうと思う。むかしの人たちが、よい夢を見て、その年の幸福を授かりたいと宝船の絵を枕の下に敷いて眠ったように、「初夢」への期待や高揚感を味合わせてくれる一句だ。

流れ着いたように人居る秋の浜

佐藤 禎子

「流れ着いたように」が「人」にかかっている俳句は、これまで見たことがない。では、どこから流れてきたのか海からなら、季節外れのサーファーが波と格闘後に浜で休んでいるのだろう。陸からならば、人間や生活に疲れた人がやってきたのかもしれない。夏の疲れも出てくる頃であろう。疲れ切った心身が秋の海風になぶられる様は波打ち際の木片のようで哀れさを感じる。しかし、「流れ着いた」で、しかもそれが「人」だから、再び自分の属す流れへと帰っていかもしれない。そんな希望もかすかに含まれていると読んだ。

名月を待てば酒屋の上に出る

浪本 恵子

何度でも、手拍子に合わせて諳んじたくなる句である。「酒屋の上に出る」というのも根拠がなくて、可笑しい。磯野波平のような父親が、お月見をしながら晩酌をしていて、お銚子をもう一本欲しくて詠んだ一句のようにも思えて微笑ましい景が浮かんだ。

初雪やエプロンかけて一年目

小林 政女

一年前の今日、家庭の主婦になったのか、あるいは飲食店などに勤務し始めたのか、「エプロン」がこんなにも清潔で輝いている俳句は初めて見た。初めてのことばかりの環境で、エプロンに落とされた滴もあったであろう。一年経ったんだなあとしみじみ思い返している人の、エプロンに降りかかる初雪が美しい。

犀眠る柊の花噴き降りぬ

小川 葉子

動物園に行くと、動物たちを見ることに夢中で、それぞれの住まいにどんな植物が植えられているかまで、注意して見たことがなかった。犀の眠る部屋の近くで真っ白い柊が甘い香を漂わせて咲いている景は絵本の中にあるようだ。「噴き降りぬ」という複合動詞に、犀の眠りの深さや健やかさも感じられて、とても心を惹かれた。

赤羽根めぐみ略歴

一九七二年栃木県生まれ。東京都在住。秋尾敏に師事。

「軸」「南風」所属、「いつき組」に参加。第三十五回

現代俳句新人賞。

## ざりざり

大石 雄鬼

箱根山よりざりざりと蝶来たる  
ネアンデルタール人なり莖挿す  
種芋にこめかみありてうごかざる  
税務署の口のよごれて猫柳  
塩田をひらたく蝶のながれくる  
太陽の落ちるところに蝶干す  
外は晴れ目の取れてゐる蒸蝶

今から約十二年前、現代俳句講座の講師を金子兜太先生にお願いし、私が司会をした時があった。講師紹介で、と言つても聴講者全員知っている状況の中で、私は黒田杏子先生との対談本『金子兜太養生訓』と句集『東国抄』の紹介を行った。対談本からは、兜太先生は時代劇が好きなこと、寢床では尿瓶を使用していること、講演の直前にトイレで話す内容を考えていることなどを紹介。『東国抄』からは「おおかみに螢が一つ付いていた」の一句のみをこの句がいいですと紹介した。すると兜太先生から、「その句のどこがいいのかね」と問われ、「どこがいいかわかりませんが、とにかくいいです」と力説したら、先生はちよつとズッコケ、笑っていた。先生がご存命のうちに、第二句集を出したかったなと思つている。

# 作品 I

宮城 稻村 茂樹

海見える方が恵方の初詣  
通院の月の初日は寒の入り  
平台に暴露の書物寒の入り  
いはく有り気な立入禁止区春の雷  
地球儀の青が広がる二月尽

岩手 小菅 白藤

雪虫のわが生ひ立ちのごときもの  
雪虫のねぐらの雪を残しておく  
大の字に寝ころんでみる新雪野  
新年や出あるく齡に犬吠ゆる  
節分や寝ねる夜の刻惜しむ

宮城 浅沼 眞規子

春昼や宮の大竈まがまがし  
春愁や歩幅に合はぬ宮の磴  
節分や鬼にも飲ませたきワイン  
泣きさうに見ゆる竈神水温む  
泰然と反る武隈の松春立てり

山形 大類 つとむ

深雪晴 九谷 盃 金 襦 手  
潔く口を結び 桜 鯛  
寒鴉嬢の家を出で来たる  
月山が在れば大雪晴と呼ぶ  
結氷す花笠踊り 発祥湖

東京 浅見 玲子

哀しみも凪いで霜夜の眠りかな  
ねんごろに返信書きぬ 喪正月  
残り時間ゆつくり刻む雪雫  
豹柄着て寒さに一歩踏みだしぬ  
水餅を婆さま拜んでまた戻す

東京山本千代子

流木も旅先にあり雁帰る  
居酒屋にありつく金目鯛定食  
盗掘の穴らしきもの煮凝に  
解け方を忘れはてたる斑雪  
糞のため五位驚水を出でにけり

東京當山孝道

みぎひだり文に流れる浮寝鳥  
凍て雲を真つ赤に割つて日の出かな  
大鏡に一部が入る冬景色  
金鯪の尾ひれに止まる寒鴉  
パズル本ずり落ちそうに春の昼

三重中村仿湖

クリームパ春の光を放ちけり  
ねぎ焼の匂ひにゆるむ春灯  
過りたる光一筋蝶なりけり  
段畑や段それぞれに梅笑ふ  
梅林や猫とおばばの三河弁

青森泉 風信子

人散りて葬りの雪影深くする  
雪に向き来世の影を掘り進む  
曲線を太く深夜の寒卵  
丹田の一筆置きて白障子  
朧夜に核のボタンのある不思議

東京岩崎嘉子

冬桜幹に輪廻の音がする  
雪明り二度寝の猥となつている  
身の内のきさらぎ昏し星飛礫  
寒月蝕安倍晴明の気配する  
なまはげの髪は海藻船方節

千葉永井アイ子

風割つて照りながら降る春の雪  
ホーローに疵の始まり猫の恋  
きさらぎや杼の反り深き艶を持つ  
草氷柱青滲ませて透きとおる  
天窓の明りほんやり名草の芽

滋賀 吉本 のぶこ

春一番かぎりなく湧く石の墓  
流水の磨ぎあをめたる日の燃ゆる  
哀歎の黄をかたむけてたんば野  
かげろふを軋ませ快速電車過ぐ  
3Dの光りの淑気蜜のごと

東京 瀬間 陽子

背脂という越冬の狂気かな  
赤の他人めいておでんを喰つてやる  
俳句では足りなくてかまくら壊す  
ボーカリストの胸たわわなり涅槃西風  
母の手はいつも濡れてる鳥曇

神奈川 加藤 明虫

ぐらぐらと目を練る水面春隣  
川底に白き朽ち草春浅し  
崖上の家を金柑迫り出せり  
紅椿の囀すフィールドアスレチック  
橋影を春禽の影突きぬけし

長野 山本 高分子

A Iと知性戦う年明ける  
喜寿の年明けカツ丼もて余す  
厳冬を祈りに祈る御神渡り  
剪定の小枝散り敷く雪田かな  
雪搔くや空き地空き家の増える街

兵庫 杉山 鮎水

しらす水揚げ三尾見捨てて加工場へ  
夫婦蒲団干さる琴瑟相和なす  
吾の名入る個所の空けあり西風の墓碑  
芹摘みを知らぬ若人畦太る  
うどん屋に喫煙の有無聞かれたり

神奈川 岩本 宣善

闕けゆきて十円玉めく冬満月  
冬銀河どこに消えたかNEMコイン  
雪もへりも降らぬ茅ヶ崎よかところ  
雁風呂や酒は男の子守唄  
右足をたたへて結弦春重し

埼玉 佐藤悦子

富士の雪眺めつ朝の速歩かな  
日本橋めぐりし青春いずこかな  
ライオン三越の紅椿くわえし真昼かな  
春の雪曇りし空を明るくす  
約束はも少し暖かくなつてから

熊本 木下弘子

芹なづな青空かんと晴れ上り  
ぼたん雪地震を生きて野良の猫  
臘梅や昼にはずむ余生あり  
風邪の中鉛筆だけを尖らせて  
春一番まといて回転ドアに入る

静岡 石川真木子

流木に骨格のあり乾風吹く  
日金山の閻魔と婆に御慶かな  
たつぷりと墨を吸わせて吉書かな  
マンモグラフィの乳腺絡み雪催  
凍て空に狸々面浮く皆既月蝕

東京 小竹ヒサ子

日本橋五旬  
如月や拾圓札の青の濃し  
三越に垂れし日の丸春の昼  
青錆の埋蔵金や梅日和  
熙代勝覧筆致やはらか江戸の春  
錦絵に造幣局の桜かな

東京 石川信子

繭の花散らして過ぎる猫車  
ビー玉を懐にして春疾走  
衣とりどり十三詣り列をなす  
餡パンを強く握りて万愚節  
囀りのたえまなく降る螺旋階

東京 竹内實昭

星冴ゆる温き手添えている時間  
はんなりと寺社境内の花見客  
鳥集う千両万両庭の木々  
吊り橋や囀り聴ゆ雪解川  
木枯しや人影過ぐる祐天寺

神奈川 小木曾 あや子

人の影うしろより伸ぶ春の夕  
一人という字画冷たしひとりの夜  
夫委ねし病棟臭う余寒かな  
病む夫と蜜月すごす春の雪  
看取りの日寒の月蝕赤く膿む

千葉 佐藤 禎子

持ち物に冬三日月を加えおく  
風邪の目に魔女の箒の動きけり  
アナグラムにはまり建国記念の日  
草若葉離れ森より生い出でし  
春星やミニーマウスのねじ弛ぶ

東京 大野 和加子

本年は旧参道より初薬師  
残りものなりし破魔矢の小ぶり買ふ  
一月の羽衣のごと夜行雲  
なじみの鯉水の池に探すかな  
新雪やダイブの子らに未来あれ

山形 堀 尚子

隣人もわれも黙々雪捨つる  
足跡なき雪に埋もれて不住なり  
春を待つカズオイシグロ読みながら  
浅葱のいと小さきに精気満つ  
春吹雪高速バスの客黙す

千葉 浪 本恵子

薄氷を見せたし夫を呼びたれど  
寒晴や普請場にあるわらい声  
見るたびにまどろんでおり日脚のぶ  
咲きそめし梅の四五輪仏間にも  
黙ながきふたりに冬日あたたかし

神奈川 村 山安子

きさらぎの身内華やく娘が生まれ  
娘が生まれ頬柔らかき桜餅  
大雪を支える寺の屋根の反り  
寂聴さん来し方は愛桃の花  
過ぎし日はうす紅に花林檎

愛知 米川 五山子

山峡の足湯賑はふ春の昼  
独活の芽の天麩羅愛でる老夫婦  
目覚ましき少年棋士やつばくらめ  
棒切れを持つこともなし春の川  
心棒のぶれない男路の臺

山形 大類 準一

七種や開きしままのレシピ集  
磨崖仏の螺髪に当たる大氷柱  
酒蔵の煙突四角寒の月  
口ずさむ歎異抄一章吹雪く夜  
恋猫の従へて来る回覧板

東京 渡部 洋一

鯰起し大漁旗が帰港せり  
梅一輪無人の駅の厠花  
昂りは野の一塊の雪の隙  
犬ふぐりなどと一笑されにけり  
渾身の少年王手春立てり

千葉 今田 述

雲暖簾出づ寒月の赤ら顔  
不協和音ワグナー連ね山眠る  
豆撒けば拾ふ多神徒一神徒  
世の起伏モーグルスキー絡め跳ぶ  
街路樹の剪定で街若返る

青森 牧 ひろし

往く人の棒になりたる寒波かな  
壺に挿す水仙ありて一葉忌  
後手を解いて寒波の風に立つ  
公魚の光散らして釣られけり  
光指す兵士の像や寒明ける

岩手 村谷 龍四郎

濁り酒遠野民宿炉辺に座し  
大寒波びりつびりつと頬凍つる  
春立つや南三陸椿咲く  
かまくらをつくり灯すや京の孫  
天空に銀河白鳥深眠り



東京秋元道子

かまくらや首都路地奥にしづもれり  
木市きいちとふ薩摩ことばの苗木市  
老耄の境はいづくわらび餅  
風光る俵万智うたはじけ出す  
訪ねあて雨水京橋硬筆展

神奈川 岩 沢 み え

春立つ日腰に脚にと鍼灸す  
未知の地へ旅立つ青年寒桜  
亡母の形見片づけ梅の空仰ぐ  
濡れ縁の猫無防備に日向ほこ  
凍空を擦過す軍用ヘリコプター

山形 小林 政 女

ミシミシとドドドドドド屋根の雪  
すつぽりと雪に埋れり蔵屋敷  
立橋のゆつくり走る雪景色  
千手観音分解されて春隣  
熊野古道少しはづれて冬の海

岩手 熊 谷 勅 子

雪の道長靴の跡続きおり  
ストーブのささやき乍ら燃えている  
雛あられ雛と語るティータイム  
冬の夜能面の目の眠そうなる  
冬の空ひとりの心たしかなり

青森 古 賀 雨 苑

さよならの背の美しき水仙花  
冬晴れや河は歓喜に満ちあふる  
問われても結論なきに二月の空  
待春やうつむくだけの北の空  
眠そうに怠そうにやがて春

青森 鎌 田 史 子

籠る日や今朝もレンジが回つてる  
啓蟄や津軽ぬけ出す切符買う  
園児らに鬼は控えめ豆撒かれ  
歩き出す甲骨文字や春隣  
いつそ野良で生きたし猫の恋知らず

大阪 富田 栄子

警官に男の子抱かるる初戎  
日曜の校門あいて凧作り  
節分や炎むらかそけき常夜灯  
佐保姫にさきがけ川の照りそむる  
敦盛の首洗ひ池水はる

東京 品川 弥寿子

寒茜いつもの杜を際立たす  
寒明けの門扉に金の刷かれあり  
早々と冬芽桜に鳥十羽  
杜にかかる雲の白さも二月かな  
神域のまことに狭く梅白し

東京 大久保 八千代

元旦や子等の談笑我囲む  
手骨折したと年賀の声元氣  
湯を攪拌初湯好き亡夫想いおり  
寒復習友誘い来るメールかな  
節分祭町会長と福は内

近所の筆友会館にて

東京 十亀 カツ子

春月やその時を待つ畝長し  
裁断試験されし銀貨や春闈ける  
もやもやを一氣に風の石鹼玉  
富士曼荼羅絵図の一途や初明り  
消しゴムで消えぬ染みあり青き踏む

東京 上田 桜

初山河狼吠ゆる犬吠ゆる  
殄滅の跡地に咲きぬ福寿草  
写楽めぐごろた石なり寒九の陽  
駆逐艦すり抜けてきしにらみ鯛  
大利根の水の飛沫や山笑ふ

東京 上田 桜

撫牛の欠けたる角に単立鳥  
依代の力石なり冴返る  
龍宮に牛の骨あり弥生尽  
少年少女春泥の靴走る  
黄泉照らす春の月なり兜太逝く

東京 小川 葉子

兜太逝く金の柳の芽吹きあり  
子供銀行出れば吾にも福の豆  
きららなる金貨の薄さ春おほろ  
桜東風ただの漢の優先席  
春蘭けて千両箱の小ささよ

三重 伊藤 立青

老人の塊句ふ焚火の火  
夢や夢 007 青き踏む  
雨水なり木桶の酒母の会話聴く  
寒明ける樺美智子と同一年  
梅いまだ腹を冷やすな陶狸

青森 大瀬 響史

凍道を杖つく同志がすれ違ふ  
雪しまく列車のなかは皆寡黙  
アイウベーと口の運動二月尽  
二月果つ終末時計は二分前  
遮断機はタイガー模様牙ゆる星

## 第42回現代俳句講座

現代俳句協会では「第42回現代俳句講座」を開催いたします。今回は宇多喜代子氏と高野ムツオ氏をお招きします。聴講は協会員、非協会員を問いませんので、皆様お誘いあわせの上、お申し込みください。

◇日時 2018年5月20日(日)

12:30～16:00(受付は12:00)

◇会場 東京都墨田区本所地域プラザ

【BIGSHIP多目的ホール】

東京都墨田区本所1-13-4

(TEL03-6658-4601)

都営浅草線・都営大江戸線「蔵前」駅より徒歩8分、J・R「両国」駅より徒歩15分

◇講演内容 「佐藤鬼房の俳句の世界」高野ムツオ氏

「鈴木六林男の俳句の世界」宇多喜代子氏

◇定員 100名(定員になり次第受付を締め切ります)

◇聴講料 当日・1500円 事前予約・1000円

※ご予約は下記の問合先へハガキまたはファックスにてお申し込みください。料金は当日受付にてお支払いとなります。

◇お問合わせ先 現代俳句協会・事業部現代俳句講座係

〒101-0021 東京都千代田区外神田6-5-4 借楽ビル7階

FAX 03-3839-8191

TEL 03-3839-8190

---

## 同人作品評

(二月号 II・III)

田中 三桃

---

短日の公園ふつと子らの消ゆ 西村 敏子

セピア色の昭和を巻き戻すと、夕焼け空の広場で歓声をあげて遊ぶ子らは「ご飯だよ」の母の声に、文字どおり蜘蛛の子を散らすようにいなくなつた。今の子はまるで神隠しにでもあつたかのように忽然と消えるのだという。母の声に代わるスマホやキッズ携帯の普及は、乾いた現代社会を生きる子らの一断面ともだぶる。

開戦日ボイラー点火指一本 阿保 子星

十二月八日は昭和十六年に、米国に対する日本の泥沼の太平洋戦争の開戦日として歴史に刻まれた。昭和二十年八月十五日は終戦日だが、頑なに〈敗戦日〉の俳句を詠む。B29の空襲警報に代わる、北朝鮮のミサイル来襲を告げるJアラートのけたたましい電子音。ボイラー点火のボタン

も、核のボタンを押すのも、指一本で足りる現代の恐怖。狂気の指導者が日本の海の両岸で吠えている。

エンタシスの虚空より雪八雲園 今田 克

〈エンタシス〉にギリシャ神殿の大理石の円柱がうかぶ。明治期に島根・松江中学の英語教師として来日した、ラフカディオ・ハーンはギリシャ生まれの英国人。大の寒がり屋で冬はオーバーを着て教壇に立ったといわれる。日本に帰化し、小泉八雲のペンネームで、日本文化を広く欧米に伝えた人としても知られている。流浪の果てに松江に安住の地を見い出した作者のハーンに寄せる思いが、雪の虚空に屹立するエンタシスとハーンが重なって見えている。

編み込みのやうな鬣麒麟秋 石堂つね子

麒麟の背は四メートルにも達する、哺乳類では随一のの

つぽとか。動物園を訪れた作者は、麒麟の長い首の鬣を編み込みに見たてた。麒麟の全身は、黄の不定形の網目もよりの迷彩色で縁どられている。天敵のライオンから身を守るためなのだが、ここでも作者は爽秋の空高く伸びる麒麟の首に、黄葉する秋を見つけて喜びに浸っている。

菊まつりタンスの底の一張羅 三浦星津女

桜の名所で知られる青森の弘前公園。花見どきともなると昭和一桁世代の近郷近在のご婦人たちは、タンスの底の一張羅の晴れ着で出かける。「殿様のお城に失礼のないように」との習わしと聞く。同じ公園で開かれる秋の菊まつりの主役は菊人形。菊をあしらった袴の和服姿のご婦人連は菊人形に寄り添う。色とりどりの菊をまとった菊御前や菊姫に映えて、まつりに優雅な趣を添えている。

石仏に朱色の残る秋の霜 大泉 秀明

霜は歳時記では冬の季語だが、東北では十月の終りごろに霜が降りても珍らしくない。夜明けにひろがる眼前の景が、磨ガラスに包まれたように乳白色にかがやく。路傍の石仏は解ける刹那の霜に粧われ、朱い頭巾が鮮やかさを増す。石仏といえは何故か柳田國男の「遠野物語」の舞台が浮かぶが、みちのくの地には子安地藏や道祖神など野仏が

多いことに気づかされる。

風呂吹きや仄かに明日の透けて見ゆ 古川 章雨

秋野菜の主役と言えば、大根や白菜がある。いずれも長い冬越しの糧となる漬物の具材には欠かせない。なかでも風呂吹きやおでん種に定番の大根は、冬の味覚のひとつ。大根の切り口が煮えて透けてくる頃が食べるポイントで、甘辛い生姜の味噌だれの風呂吹きはからだの芯から温まる。家族の健康と台所を預かる者として、食卓を囲む家族の満たされた笑顔に安堵する。と同時に明日の活力と仄かな希望の灯を風呂吹きに見出し、確かな目があたたかい。

樟脳の匂ふコートの人過ぎぬ 中村 穂

気象衛星の運用で毎日の天気や台風の進路、日本海側の今冬の豪雪などの予測の精度は、格段の進歩を遂げた。そのため用事で出かける二、三日前からコートをハンガーに掛けて、独得の匂いのする樟脳の匂いとりができた。掲句は火急の用で、匂いぶんぶんのコートを着込んで出かけた様子がうかがわれる。

足早に通り過ぎる背中に張りついた不安と緊迫感が、ことさらに冬空を寒々とさせる。

## 今月の秀句十句

吉本のぶこ

秋風や木馬の芯に強き発条 桑原 三郎

〔俳句〕十二月号「強き発条」より）二月号に掲載

秋の初めにふと、夏とは違う風に気づかされる瞬間がある。遊園地には色とりどりの木馬が、子供達を誘うかのように目の前を駆けていく。ここには、覚めた意識と冷静なまなざしがある。生き物ではない木馬のはらわたは発条だという。そこへ季語「秋風」を配し、表層から内奥に踏込み、木馬の本質、生きた馬ではない哀しみが立ち顕れた。

枯蘆や太陽すな色に凝る 夏井いつき

〔俳句〕二月号「さえずる」より）

蕭条とした枯蘆原には窪地もあり、霜の降りた後もある。風が山嶺から野面を渡って来る。太陽は中天に昇っているが、枯色に染まり凍っている。この風景は死を想起させる。昔から、一処不在の捨聖や詩歌の放

浪者達は、枯野を旅路の果ての死に場所とした。その思想は『古事記』にもみられる。自然感覚に満たされた神道的な世界観といえる。

暮れなすむ廃炉は浮巢のかたち 若森 京子

〔俳句〕二月号「憂国忌」より）

一読して、福島の子力発電所事故後の建屋を思った。何より恐ろしいのは、目に見えない放射性物質の破壊力である。事故後すぐに、日本の科学者が福島の実態系汚染の実態調査をした。放射能は四十雀の食循環に入り込み、セシウムが頭に集中しているという。レイチエルカーソン（アメリカの海洋生物学者）の『沈黙の春』の警告のように、生命の破壊が迫っている。

種馬の舌なめらかや草清水 大木あまり

〔俳句〕十二月号「柘忌」より）二月号掲載

動物の舌のグロテスク感、肉感がリアルである。最

近は馬そのものをみかけなくなつた。句を詠むには、自然に分け入り、遠い昔からの本能や記憶と対話しなければならぬ。〈種馬の舌なめらか〉は、自らの無意識なる深層を掘り下げ、野生の感覚を蘇らせようとしたのだろうか。種馬という種の持つ官能性が嫌みにならないよう、草清水に着地させた。

極月のまつただなかの玉子焼 山崎 聰

〔響焔〕二月号「ゆらゆらどん」より

極月は一年中で最も慌しい季節である。そのせいなのか、感覚的にはあるが、普段は見えにくい時間の不思議を、幾分可視的にしてくれる。〈極月のまつただなか〉とは、時間の形象化に他ならない。菜の花色の玉子焼は、移ろう時間の一瞬の光りのような効果をあげている。極月の時間の奥行を描写している。

赤い鴉が睨りさうなる鳥瓜 石倉 夏生

〔響焔〕二月号「裡」より

晩秋に赤く熟す鳥瓜を、〈赤い鴉が睨りさうなる〉と、意表を突くような表現をした。そう詠むと、不可思議さや謎も充満する。実の中の種は、かまきりの頭に似て気味が悪い。真赤な実は、人が抱えている闇や

異界のようにも思えてくる。またこの句のように、省略が大胆であればあるほど、季語は象徴性を高めていく。

甘鯛の憂ひ詰まる額かな 山尾 玉藻

〔火星〕十二月号「二相一味」より 二月号に掲載

甘鯛の頭は円錐形をなし、その目は今にも泣き出しそうである。〈魚店の甘鯛どれも泣面に（二村古魚の句）〉は、先にあげた玉藻氏の句に近似の発想がある。頭部の際に目があり、佻しげな貌の端っこに固く結んだ唇がある。〈憂ひの詰まる〉と擬人化し、感情を被せた。知ばかりを肥大させ、活気を失くした現代人の貌に思えてくる。

金閣の金を囁して悴めり 深澤 鱗

〔火星〕二月号「火星作品」より

金閣寺の射すくめるような光りは、伽藍や仏像のみが持つ天上の殺気と名づけられたくなる。あの世の楽土をこの世に明らかに再現したともいえるこの過剰な金色のエネルギーは、見る者の意識を騒がせ疲れさせる。〈囁して〉には、金色に馴染めない心情が滲んでおり、季語の「悴む」の本意が巧まずして生かされている。

すつばさの酢莖や歳の尾が見ゆる 飯田 晴

〔雲〕二月号「すつばさ」より

かつて日本人にとって切実なものは、季節の循環であった。田畑を耕すにしろ、商いをするにしろ、鉄を生み出すにしろ、もろに自然を相手にせねばならなかったからだ。だがどんなにきびしい労働に携わろうとも、好奇心は尾の長い猿のようにどこへでも向かう。度が過ぎると、後悔や失念も生じる。かように、人間模様は酢莖のようすつばい。

電車待つ人に耳ある寒さかな 高橋 雅也

〔雲〕二月号東雲集「サイレン」より

人は一人ひとりが孤独である。孤独であるからこそ、一層人恋しい気分させられる。凍てついた真冬は、寒さによって耳が突起物であることに改めて気づかされる。人に無関心で、ドライな現代人の心の有りようを聴き分けるのも耳である。人に生れついた者同士のひそやかな連帯感が窺える。

## 「陸」ホームページのご案内

「陸」ホームページ (<http://sky.geocities.jp/rikuhaik/>) には「陸」の田川飛旅子創刊主宰、中村和弘主宰の俳句紹介、現代俳句協会各賞、陸賞、陸新人賞などの記録、各地俳句会の紹介、同人による句集紹介などのページがあります。ネット環境のある方はぜひサイトを訪問してみてください。「陸俳句」で検索すれば出てきます。なお「陸」会員以外の方も参加できるインターネット句会（編集部選のみ）もあります。

編集部



# 作品Ⅱ

※印は、一人一句中村和弘の共感した句

埼玉 及川 明子

昨夜の雪泣かせて歩くもの忘れ  
月食の畑のものみな凍らせる  
※しずり雪一喝の如く肩に受く  
噓する夫大きくて三面鏡  
電子辞書の電池をさがす冬銀河

埼玉 古閑 容子

左義長に手を翳しての血の廻り  
新雪を踏む月面の飛行士に  
※着膨れて赤銅色の月を待つ  
梅開く窓越しに見る新生児  
背負籠の菜花の匂ふ京成線

東京 今田 克

芹摘まな耕運機搔く畦の香を  
一揆村飢ゑの田を守る霜柱  
※雪灯籠耶蘇に帰依せし初老人  
梅一輪季ときに背きし雨負ひて  
連翹の黄や囀れる童話館

山形 大泉 秀明

青空や引いて見上げし屋根の雪  
雪晴の音に振り向き滑り台  
電卓を叩きし八百屋寒茜  
雪原の先に鉄橋渡る音  
※雪原に野球のスコアボードかな

青森 阿保子 星

横なぐりの頬刺す雪や多喜二の忌  
俎板に音を遊ばせ初厨  
言の葉の重き津軽や雪積る  
大寒の空港へロシア語降りて来る  
※いつの世も隅に母あり魔の吹雪

青森 伊藤 泰子

すぐ膝に乗りたがる猫漱石忌  
除雪車の刃跡のひかる通学路  
三代の襲名披露青木の実  
標のあと標で追ひにけり  
※恋知りし猫と目が遇ふ目を逸らす

神奈川 田中 眞青

母の唄「唐土の鳥が」と齋打つ  
お主まで「今年限り」の賀状かな  
一等賞願ふ幼や初詣  
※屠蘇の座の人に酔ひたる高校生  
七福神若きら嬉々と銭洗ふ

長野 徳竹 三三男

春浅し山の八百屋は店開けず  
梅二月親子が占める滑り台  
百の木に百のうれひや雪になる  
かがむだけ屈む裸婦像凍てつけり  
※戸隠山を下り来て啼けり寒鴉

東京 西牟田 ふみ子

大の字の海星にはしやぐ冬の浜  
桜貝撒きちらしてく波の音  
※冬風や沖のマストに雲光る  
月食の重量感や屋根に雪  
仁和寺展出でスカイツリーは寒茜

東京 石堂 つね子

羽衣と思ゆ冬宙イブシロン  
寒し冬あたり前の辛きかな  
※白梅のつばみセンター試験場  
雪子報無音無響の夜明前  
寝不足の始まる五輪春立ちぬ

栃木 阿部 博

冬五輪テレビ応援今日もまた  
冬五輪大活躍の日本勢  
孫からの高校合格電話あり  
※前庭も背戸も囀り日々繁く  
記念日や憲法論議沸く兆し

岩手 高橋 時子

※目に見えぬものにも礼して会開く  
孫からの郵便届く雪連れて  
手の力抜けたる如しバレンタイン  
計画の無き生きざまよ雪の降る  
ひたすら降る雪車上二十センチ

山梨 温井 幸子

石室に夫婦像みえどんどの灯  
はばかりず大声出せる福は内  
※親子らし猪の足跡春の水  
伏兵は手強い畠の土竜かな  
引つぱれば葱は千切れて凍てし土

鳥根 大内 政江

どつしりと老舗にすわる鏡餅  
点灯す聖樹外科医の眉濃ゆし  
早春の野を来た汽車が野に走る  
片言の初電話来る初日記  
※地震多し雪の降り込む明りの輪

東京 遠藤 豊成

腕まくりする若者の冬模様  
風花を追ふママチャリの後席  
スーパ―に置き初午のいなりずし  
※老犬を送りし雪の名残りかな  
平昌<sup>ピョンチャン</sup>に舞ひ白鳥の美しく

神奈川 本多 洋子

一人居や今朝も尺幅除雪さる  
雪下しゆるる竹林稽首す  
湯奴や自作の土鍋も底浅し  
※雪後の天いざさせ給え四股を踏む  
冬籠り尋ぬることを箇条書

東京 萩原 君子

鳥雲に吾妻橋行く人力車  
囀や御苑にカカオの実を見たり  
※初糶や魚が目を剥く鱮上げる  
初場所や鬻と異邦の坩堝なる  
築地市場閉鎖を聞いて河豚食べに

栃木 小保方 京司

※残り餅ぶつりと切れて二月かな  
底引網我先競ふ春の潮  
行き帰り知りたる畦の犬ふぐり  
春の雪柄にないこと二つ三つ  
急がずに急かされず生き木瓜の花

青森 三浦 星津女

※早春の花屋の言葉買ひにけり  
野暮用の春の底冷わたりけり  
寒明けやぎろり眼玉の虎の画布  
一僧のこぶしに雪解風の赤  
さへづりや旅立つ少女十九歳

青森 木村 詩織

春立ちてあるべき姿原点回帰  
※底冷えやピアノの線に意識あり  
春浅しソナタ月光最終章  
血の色に染めてラヴェルや雪解水  
チエロ抱きカザルス冴ゆる鳥の歌

東京 杉山 よし江

除夜詣にひとりの暇を紛らはす  
※追々に心経遠し梅の花  
納得す白鳥三羽田を翔ちて  
千両や船宿に聞く能登言葉  
貫ひ湯を待ちし桶屋の囲炉裏かな

岩手 多摩川 州

枯芝に山水描く石の位置  
木と紙の杜まじきる白障子  
※一月や七つの海へ続く川  
隣国の冬の祭典空ひとつ  
年の豆七十五とは弥栄に

大阪 前塚 嘉一

精算を終えて買い足すヒヤシンス  
ベゴニアに机上整理を迫られる  
マスク取りグランドゴルフ集中す  
餌置けばそつと寄り来る目白かな  
※百年の友の如くに目白来る

神奈川 猪 狩 鳳 保

豆腐屋の釣銭濡れて余寒かな  
山焼の髪に野獣の匂ひかな  
春泥の靴小児科につづきをり  
※首輪なきブータンの犬春の泥  
春泥に出入口入口なかりけり

## お知らせ

中村和弘主宰が本年三月に現代俳句協会会長に就任いたしましたので、お知らせいたします。

陸編集部

## 陸東京句会

日時 五月二十七日（第四日曜）午後一時より  
指導 中村和弘  
出句 三句  
場所 文京シビックセンター

B1アカデミー文京 学習室

☆文京区春日一―十六―二十一

電話 ○三―三八―二―七一一

- 丸ノ内線・南北線 後楽園駅  
4a・5番出口 徒歩一分
- 都営三田線・都営大江戸線 春日駅  
文京シビックセンター連絡口 徒歩一分

## 〈会場案内図〉



陸路集鑑賞 (二月号)

大類 準一

鯛焼を開く立体駐車場 三宅 桃子

ほっこりと温もりのある鯛焼と広く寒々とした立体駐車場の対比。時折は空つ風が吹き抜ける。そういう光景がすぐ眼に浮かんだ。「鯛焼を開く」という一瞬が切り取られているので句に緩みがない。

読者にもそういう体験が想起されて、心情がじんわりと伝わってくる。

芋煮会予約席なる赤い紐 錦戸 正行

芋煮会と言えば、山形県の風物詩である。宮城県の錦戸さんにとつても同じだろう。

この句の着眼点は、「紅い紐」である。秋の気配が深ま

る中でのよい匂いの漂う、賑やかな光景は描かれていない。「物」である「赤い紐」にドラマの始まりが集約されている。

耳たぶに触りたがる児よ花八つ手 別所 弘子

幼い児がいろいろなものに興味を示し出した頃の様子だろうか。母親の耳たぶだろうと思うのは、母と児の深い結びつきを連想するからだ。「耳たぶに触りたがる」ということには、そういうことがすでに感じられる。

地味だが、勢いのある「花八つ手」という季語は、この場合びつたりだと思う。即き過ぎないこともよい。

小春日の廃校ブナの匂ひかな 小田桐妙女

私の町にもこういう廃校が見受けられるようになった。

榎林が近くにあつても、子どもたちがいる校舎そのものは櫛の匂いとは違う。この匂は、廃校になった校舎自体が櫛の匂いを持つようになった、そう作者は感じたのだらう。本格的な冬の到来を前に、廃校の持つ哀しさが感じられるが、「小春日」が和らげている。

ブナは、漢字表記でよいと思うがどうだろうか。

ロシア語の交じる雑踏深む秋 小村 寿子

「ロシア語の交じる」ことによって、雑踏がほどよいリアルさを持つことになった。「語」という音が交じるところがよい。溶けあわないものがその中にある、ということなので「混じる」ではなく「交じる」。「深む秋」も上の句によって情緒過多になっていないと思う。

病む夫の作業療法大根引き 高橋エイ子

「大根引き」によって、句の雰囲気が暗くなっていない。「作業療法」には、回復の様子が表れているので、「病む」は無くてもよいと思うが、どうだろうか。作業療法としての「大根引き」には、むしろやさしく見守っていることが感じられる。また、「大根引き」は力強い。

鐘楼に祖父の名もあり銀杏散る 高橋 仁

鐘楼建立の際に篤信者であった祖父の名が記されてある。そこに連なる家系の誇りが感じられる。「鐘楼」と「銀杏」は、やや即くかもしれない。

海よりの風の明るき蜜柑山 安住 正子

私も旅先で幾度かこういう光景を眼にした記憶が甦った。そういう意味では、多くの人がこういう俳句を詠んでいるだろう。「風の明るき」には独自の捉え方が出ていると思ふが、さらに新たな発見が求められるのではないだろうか。

運慶の玉眼朱を帯びて初冬 宇佐川うさこ

一読してややつつかえるように思う。「朱を帯びし運慶の眼」で、玉眼と知れるのではないだろうか。「初冬」は「冬初め」ではどうか。また、「初冬や」と上五にすることはどうだろうか。などと考えながら鑑賞した。しかし、すんなり読めても、作者の本意から外れてはいけないことである。

運慶の朱を帯びた眼と初冬はよいと思う。

# 作品Ⅲ

※印は、一人一句中村和弘の共感した句

三重 中村 穂

現世を赤鬼青鬼来る二月  
立春の三半規管水の音  
四本のひとつ浮き足冴返る  
手の中の手をいとほしむ戻り寒  
※理科室のルーペに浮かす春の塵

神奈川 西村 敏子

愛知 北原 千枝

地球からその影見上ぐ冬三日月  
何時の間に雪掻きの道魔法めく  
※冬枯れに紛るる鹿に凝視さる  
寒の水激し音立て洗浄す  
仏像は確と鈍彫寒明けり

ゲルニカの陶画に触れり冴返る  
※だしぬけの初音に見合ふ二人かな  
峠二つ越ゆふるさとの梅日和  
涅槃図の足許に座す猫の影  
鳥帰る望郷の鐘鳴り響く  
信州・駒場長岳寺にて

東京 鳥巢 有子

三重 藤川 夕海

人を待つ間のゆたかななる福寿草  
模様替へして positioning のシクラメン  
機嫌よき川音たてて猫柳  
残雪をかがやかせたり街路灯  
※はこべらやまめにはたらく洗濯機

※南国の雪降り尽くす父の椅子  
毛糸編む綺羅を日差におよがせて  
鉄階段弾まし掃きぬ鬼の豆  
雨水かな緩衝材のぶちぶちと  
春月夜引く飴色の尾は猫か



青森 田中三桃

※順はぬ民の碑冬深し  
裸婦像の雪の真綿にくるまれて  
白神の立春の精蛇口から  
大小の大の字刻印雪ツ原  
いとほしき影透かせるや雪螢

神奈川 小川七穂

※漏るる灯やぼつねんとゐる雪達磨  
月蝕や遠くどこかの救急車  
春分の日や生みたて玉子掌に  
口紅の新品ポスター寒牡丹  
ひとり居のひとりごとなど冬守宮

東京 保坂純子

ひとひらの雪の音立つビルの壁  
剪定の闇に香気の誘える  
春の雪白く籠れる医院の灯  
待ち合いのわが名形に春半ば  
※百歩まで顔上げて行き辛夷の芽

岩手 吉見弘子

寒気団居すわるらしき風の音  
梅もどき紅の名残りや春近し  
※熱ければ雪を投げ入れ檜風呂  
大寒波仏像の鼻赤らめる  
楸邨の「秩父の夜」なり吹雪き消ゆ

青森 村上鮎黒朗

しばれるやこの地の良さと缶を切る  
雪掻きを終へれば皆がチャンピオン  
浦里の若き漁師や雪うさぎ  
落書きのごとく雪掻く山の里  
※雪掻きの声に寝起きのまま伍する

東京 青木 淑

マンドリン奏でる指先春來たる  
房総の夫婦が育てる金盞花  
道普請音かしましや春の午後  
※鉄柵に寄り添い二輪クロッカス  
春愁や友の電話の受けこたえ

福島 田中 七子

みちのくぶりあはれならざる芋雑炊  
ひとり家にひびく噓のきりもなく  
※寒波来と聞きてより夜の暗さかな  
磨硝子の白に囲まる雪の朝  
籠る身に届きし春の光かな

岩手 佐々木 玉枝

おもしろい襟巻状に伸びる猫  
休日の女子力以て雪を搔く  
凍て道に子が手を添へて呉れしかな  
※吾に余暇たつぶり与へ寒明くる  
雪解風齒医者通ひも終りけり

東京 小林 千香子

宇宙まで一直線に冬晴れる  
採氷湖厚みを増して眠りけり  
この冬のレタスの高値小石蹴る  
崖つららパイプオルガンミサの声  
※海鳴りや砂丘のあたり雪催

山梨 水上 美知子

※大寒を敵とも思う齡かな  
石仏も過疎の一員冬帽子  
雪搔や漸く辿る屋敷神  
粕汁や五臓六腑に送信す  
居座りの冬將軍や老いの愚痴

神奈川 佐々木 達治

ほどほどの酒に和みて初句会  
荆妻を聖観音と称ふ春  
※大寒やひねもす富士の見えゐたり  
雪晴れの屋上庭園富士見えて  
赤黒く食まれし月に星冴ゆる

青森 古川 章雨

凍て星や心眼で見る皆既月食  
※飴玉の噛む音澄みて雪止まず  
雪晴れや道を行く人皆影絵  
新しき教科書包む春の風  
凍てる夜や五感すべての固まりし

山形阿部雅子

節分の鯛の塩固め婚姻す  
 ※白無垢から赤に名の百合春隣り  
 椿山荘かまくら入りの刺身なり  
 立春の機上衣召す富士の山  
 庄内空港待てども雪雲羽田戻る

愛知山田和歌子

大寒や奔流に浮く鳥の影  
 待春の金平糖と万歩計  
 立春の光吸ひ込む有平棒  
 締め鯖の酢のききすぎる余寒かな  
 ※フランクパン担ぎて帰る春の星

山形松浦廣江

※祈年祭天狗の朱印躍りおり  
 春立つや翡翠の腕輪怪くなる  
 眠り猫右往左往の動きあり  
 春告げる翁の笛の響く坂  
 春日注す神社門前デジカメラ

陸各地句会日程

句会名	日 時	会 場	幹 事
東京句会	第 4 日 曜 日 午後 1 時より	国立オリンピック記念青少年総合センター または文京シビックセンター	
栗の会	第 1 日 曜 日 午後 1 時より	中野区中央 4-57-1 桃園地域センター ☎(03)3382-5151	町山直由
鶴岡句会	第 2 (1)土曜 日 午前 9 時半より	鶴岡市立図書館	古川京子 ☎(0235)22-8229
蒼鹿句会	第 4 木 曜 日 午後 1 時より	仙台市内の市民センター (その都度確保)	浅沼真規子 ☎(022)304-3766
鶯鶯沼句会	第 2 木 曜 日 午後 1 時より	代沢地区会館 (下北沢駅南口)	岩崎嘉子 ☎(03)3468-2553
空吟行会	第 1 土 曜 日 午前 10 時半頃より	その都度確保の会場 (東京周辺)	佐藤禎子 ☎(0436)41-9096
茅例会	第 2 土 曜 日 午後 1 時より	ネスパ茅ヶ崎ビル ☎(0467)87-6666	岩本宣善 ☎(0467)82-2949
茅研究会	第 3 日 曜 日 午後 1 時より	同 上	同 上
鳥語俳句会	第 3 日 曜 日 午後 1 時より	名古屋駅前 愛知県産業労働センター	中村仿湖 ☎(0594)21-9850
序曲句会	第 3 水 曜 日 午後 1 時半～、原則	阪急山本・大島事務所 ☎(0797)89-4090 時々吟行	杉山鮎水 ☎(0797)86-9355

## 天動説

三宅桃子

鞆韃からデッサンの掌に戻りくる  
桜降り触るとやわらかい頭皮  
山吹の両まなじりをこぼれだす  
インド象しめりて嬉し菜種梅雨  
蒙古斑の両尻熱く海市見ゆ  
飯蛸を噛みつぶしては淀みおり  
踏み絵へと身を乗りだして天動説

学校の廊下のような場所で繰り広げられるトレイン・ダンス。顔を白塗りにしたレオタード姿の三人の女性が、一列になり列車のような動きを繰り返す。鮮烈で、少し滑稽な音楽が耳に焼き付く。

マイク・ケリー展@ワタリウム美術館。映像展示「DAY IS DONE」の中の一幕。

映像が切り替わり、三人の女性との関係が不明なデビルマン（顔を赤く塗った男性）がなにやらおぞましいことを話す。気づけば、また画面が切り替わり、トレイン・ダンスで階段を上る女性たちが映し出される。意味性の断絶、抒情のない音楽。混乱してくるが、心は確実に反応しているのがわかる。映像のそばには、現実に撮影されたと思われるレオタード姿の三人の女性の写真が掲げられている。

「課外活動 再構成」と題されたその作品は、実際の課外活動で撮影された写真と同じ格好をした登場人物が、彼の制作したシナリオに沿い、映像上を自由に動き回り、発言する。発言は、偏見やエゴイズム、社会規範など、社会の病的な部分を誇張するような内容で、大げさな身振りやダンスを挟む。彼が、課外活動を発端として世の中の「決まり事」や、それに捕らわれた私たちを、冷静に俯瞰していることがわかる。私はケリーの眼を借りてその世界を見、絶望するようで、なぜか明るい心持ちになつてくるのだった。

ケリーは言う。

「ぼくたちは支配的な文化の影響を受けながら制作するほかないから、それを使って遊ぶのさ。分解して再構成するんだ」

分解して、再構成する過程の中で、別の意味性が立ち上がる。目の中で古びて硬直してしまっているように思える物事が、「あたらしく」よみがえる可能性を秘めていることに気づかせられる。それは、閉塞的な世界に開ける風穴だ。ケリーの展示を見ながら、俳句のことを思った。

五月人形殺という文字見ぬ日なし

牛乳配達枯木の中で棺と会う

冷奴無傷立方体として在るも

「田川飛旅子読本」角川書店編

日常に根を張った状況や物事が、組み合わせによって非日常性を醸し出す。それはあらたな視点を獲得するために格闘した結果だ。俳句は多かれ少なかれ、現実を俯瞰する性質を持つ。その視点は、マイク・ケリーに通じる、ゴダールに通じる。現実を俯瞰し、滑稽さに笑いがこみ上げたとき、ふと、世界が愛しくてたまらなくなる。俳人たちが、日常をこなしながら、ひそかに句をしたためていると思うと、なんだか胸がどきどきする。俳句は世の中に対する静かな革命である。

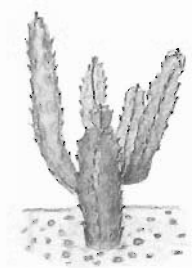
# 陸路集

## 中村和弘選

氷点下の朝日が顔の前にある  
神奈川 駒木みどり  
立春の川の光を渡り来る  
荏柄天神二列渋滞受験生

吹雪く日の巨木の洞に子等の声  
兵庫 竹田 晩成  
子等の基地覗いて鳴くや冬鴉  
月蝕の闇にまぎれて郷の雪

一人寝に窓外の声寒夜かな  
東京 平田 正枝  
マスクの娘スマホ片手に眠りこけ  
八十歳の闘志にも似て冬茜



残雪の濡れて流れて日の匂ひ  
 雲終へて休む小猿に東風やはし  
 ワシコフの声もて追へり恋の猫

神奈川

永井 良和

消しゴムにコンパス刺して窓の雪  
 語りかけ暖炉のそばで犬の骨  
 将棋大会温風あたる赤ら顔

山形

長谷川佐知子

川沿ひの屋台の消えて鳥帰る  
 蠟梅の伸びゆく枝の蝕む冬満月  
 あかくあをく影の蝕む冬満月

東京

名嘉真玲子

舳先光る船玉神社春さざす  
 鬼ヶ瀬といふ海原の白衣かな  
 牙返るパントマイムの流氷群  
 アラスカや鳥の形の流氷群

東京

根岸三恵子

神奈川 藤倉 頼江

年祝ぎの日本手拭犬張子  
丘陵の墓の残雪夫の忌  
庖丁の柄つかにひび入る朧かな

東京 三宅 桃子

近眼の末広がりに百千鳥  
異を唱う口のかたちやうぐいす餅  
蝶々をまきちらかして拵声器  
蝶番とれて膨らむ鍊かな

青森 平 恵

いつの世も白息かける母は子に  
風花の横一列に生まれけり  
ひしやげても桶は桶なり燕漬かる

青森 小田桐妙女

乳貰ひ損ねる仔猫小さかり  
被災者の目と紀信の目春浅し  
ヘッドギアの男覗く春の闇



青森 桜田 花音

節分の鬼の涙を拾ひけり  
銭湯の硬き煙突二月尽  
ゴムまりの高く弾んで春来る

青森 清水山植子

雪搔きをして我が領地広くする  
樹の中で煌めいてゐる青き星  
年新た余所余所しくも糊利かせ

青森 白鳥 青羽

大風や真つ直ぐ伸びる生命線  
浅蜷汁縄文の燠そのままに  
まんさくや北のまほろば出発点

宮城 小村 寿子

寒明ける鮫の肌めく乳銀杏  
雪眩し鴉の羽根のてらてらと  
海に札花菜盛らるる雄勝石

宮城 斎藤 美和

剪定の終えし中庭月明り  
古草踏み喧嘩の詫びを探すなり  
春浅し猪苗代湖の波幾重

宮城 高橋エイ子

寒卵「滋養」の文字にひかれたる  
シャンプーの香り春らし美容室  
春の空気を張りつめて認知テスト

宮城 高橋 仁

ご神体は伝田村麻呂初詣  
神鈴の網の手脂初詣  
橙は頭でつかち鏡餅

宮城 錦戸 正行

金星のつかず離れず寒の月  
歳時記を開いて閉じて日向ぼこ  
樽の中くの字くの字の千大根

栃木 小林千代子

雪の朝黒猫一びき何所へ行く  
立春や寒波居据り一週間  
孫豆まき犬ちよると食べ回る

千葉 森井美恵子

雪の夜の青一面の世界かな  
白梅のより真白なり街路灯  
寒明けるミルクケーキのたまごいろ

埼玉 杉沢 信一

花鉢に春の日差し  
の脚早し  
リュック負い三寒四温手と足に  
マスクの中の笑顔で別れたり

東京 安住 正子

舳倉島さだかに風の光りけり  
恋猫に銀座八丁広からず  
退院の夫の朝餉の寒卵

東京 池崎 昌子

撫の幹黒き雪しろ走りをり  
納め札深呼吸して燃え上がる  
リハビリの吐息も言葉冬ぬくし  
友よりの島の黒糖冬籠

東京 石井 節子

大寒や絵馬の重なりただならず  
枕びようぶ汽笛の音の通り過ぐ  
春泥や木下サーカスもうこない

東京 宇佐川うさこ

栄螺堂の隙間より入る春の雪  
春泥や青鷺と鶺鴒の並びをり  
四十雀囀のまだとのはぬ

東京 大塚みづゑ

嬰を抱く腕の重みに春の色  
鬼は外声は大きく小さい手  
春光や赤子臉を固く閉じ

東京 川上みさ子

春浅し五体そろわぬ兵馬備  
川の名を地下に沈めて春眠し  
雪跳ねるヒマラヤ杉の木霊かな

東京 菊地 雅子

古書街の知覧特攻リラの花  
大寒や姫の九想図灯に照りぬ  
図書館は立体絵本ヒヤシンス

東京 塩坂 泰子

白梅や銀世界に耐えなお白く  
梅祭待つつかに蕾膨れ来ぬ  
青空をうずめ尽くして梅咲けり

東京 鈴木 敏子

爪先でゆたんぼ探る深夜かな  
家いへに梅の古木や梅の里  
紅梅の映りし池や鳥あそぶ

東京 瀬間 ろ敏

フアーブルのラボレームスや秋実る  
ポラリスへ哲学の道御神渡り  
河豚の会やがて交々来世かな

東京 俵 征市郎

阿蘇谷を春の虹へと馬曳かる  
爆裂火口雪積み重ね静もれり  
櫓の宿蒙古野馬を訥訥と

東京 中村 曠

野鳥待つカメラの放列雪の果  
立春や香のけぶりに父偲ぶ  
夜更けて憚りながら雪を掻く

東京 松川 和子

島人の日帰り受診草青む  
春暁のひと筆描きのスカイライン  
毛糸編むイミテーションの乳房かな

東京 村越 正信

松崎の鰻絵おぼろに浮かびけり  
裸体像の視線の先に春の星  
春の空スカイツリーを際立てり

東京 吉川 孝子

肥後椿都電づたひの下屋敷  
切絵図を体よぢらせ見る日永  
しづり雪神田に客の戻りをり

東京 渡辺 扇大

木の震へ我が身に移る余寒かな  
マニキュアの光一閃歌留多飛ぶ  
さざ波を越え来る波や風光る

東京 山田恵美子

すべりたる身のすがりたる雪の山  
病み上りの陽をまぶしめる日向ぼこ  
親ばなれの子鴉の声やわやわと

神奈川 伊藤 岳栄

蠧からえみし蝦夷勿来の関に冬北斗  
気嵐や雲を割るかにご来光  
強霜のその上にまた霜柱

神奈川 加藤 浩二

星団を仰ぎ死にゆく寒鴉かんあかな  
遠野火や風に舞ひたる相聞歌  
薄目開け春を窺ふ赤子かな

神奈川 志和 雅代

噴火山鎮座する如眠りけり  
木の芽時天満宮の絵馬の揺れ  
休火山凹みの底の根雪かな

神奈川 地葉 幸南

初詣二列に並ぶ詣り客  
梅林に早咲きの花めじろ来る  
雪降りて赤い実早々なくなれり

神奈川 土岐 詳恵

月食やおでんの卵沈みゆく  
猿人の産声はるか竜の玉  
月蝕や絶えし狼影残す

神奈川 原 昇

春光やりモージュ愛づる老婦人  
畳の目かぞへておはす雛かな  
春蘭やいくつかぞへて奥の院

神奈川 三宅 不遜

補聴器を捜す人ゐて春の泥  
立春の箸に納豆つまみけり  
暮れ遅しチャイムの市歌は唄へない

愛知 別所 弘子

日脚伸ぶ朝刊展げ今日の位置  
コロツケの湯気を頬張る四温かな  
観音の福豆三粒持ち帰る

三重 正木おる

白菜のおもみ微睡む膝のうえ  
あちらこちら白のマスクの不信任  
東風の街きみもあたしもエアギター

兵庫 藤井きよ子

着ぶかれてスーパームーンの虜かな  
あたたかや鱈は日差しにのつたりと  
冬の空月は地球とかくれんぼ



# 選後評

中村 和弘

氷点下の朝日が顔の前にある

駒木みどり

氷点下何十度の寒さの中であれ、太陽は昇る。そんな寒気の中だからこそ、朝日がいつそう有難い。地球が氷河期でも多くの動物植物が生き残り、その後の進化に及んだのは太陽あればこそと思う。自然から離れて都会生活をしていると、それを意識しなくなる。

〈朝日が顔の前にある〉は、キラキラと輝く朝日と真正面に向き合っている作者の顔が見える。

吹雪く日の巨木の洞に子等の声

竹田 晩成

縄文杉とまではいかなくても巨木はある。そんな巨木の洞に入ったたりして、子供達が遊んでいるのだろう。吹雪の日、巨木の洞から子供の声、ちよつと意表をつかれたような作者の気持ち。ケルトの神話だったか記憶はあいまいで

あるが、こんな光景があつたように思う。子供の生命は精霊のように強い。

八十歳の闘志にも似て冬茜

平田 正枝

高齢化社会、八十歳を迎え闘志が湧いてきた。この気持ちこそ尊し、である。冬茜という季語が実に新鮮。春や夏の茜空と異なり、ひっそりと茜色を滲ませている冬空。この色こそまさに八十歳の闘志と、私も思う。

後期高齢者のレットルをはられた私も励まされたしだい。

ワシコフの声も追へり恋の猫

永井 良和

西東三鬼の句に〈露人ワシコフ叫びて石榴打ち落す〉があり、そのパロディとも言つてよいだろう。恋猫のあの声、それを追うのには並の大声では効果なし。露人ワシコフが石榴を打ち落した時の声、と自分の出した声を喩えてみたのである。

語りかけ暖炉のそばで犬の骨

長谷川佐知子

愛犬のお骨だろう。暖炉のそばに、その骨壺が置かれている。その犬が生きていた時の様にお骨に語りかける。ふと元氣だった頃の犬の貌が目には浮んだりする。良い事も嫌な事も黙って聴いてくれる。犬と人の関係が、この句に集約されている。太古から人と犬はこの様に結ばれてきた、と感じさせてくれる。

あかくあをく影の蝕む冬満月 名嘉真玲子

月光だつて一色の訳ではない。赤い月、青い月、橙色の月等々。その月光による物の影も、赤く青く多彩。その影が風景を蝕んでいるようにも、と作者は感じた。

既成概念にとられない把握、発想が大切。(影の蝕む)で心象的、造形的になった。

鬼ヶ瀬といふ海原や春一番 根岸三恵子

瀬と言うのは、普通岸に近い水深の浅い所を指す。この句はそれが海原にあった。おそらく暗礁などが重なり、海流が複雑な所を、昔からその様に呼んでいるのだらう。船の難破などが多く、鬼ヶ瀬と呼称することで警告をしてきた、と思われる。春一番、その辺りががひときわ波立ってることだらう。

庖丁の柄にひび入る朧かな 藤倉 頼江

朧に風景も人も潤んでいるある春の日、庖丁の柄にひびが入っているのを見付けた。使い続けている庖丁なのにそれまで気が付かなかった。朧の雰囲気はどこかに何か不吉な感触もあるうか。ごく日常の生活の中にもちよつとしたこの様な発見もある。

異を唱う口のかたちやうぐいす餅 三宅 桃子

鶯餅は、説明するまでもなく鶯の色、形に似せた季節の和菓子。その形が作者には何か異を唱える(口の形に見えた。政治にしろ仕事にしろ、それは違うと言いたい事が沢山ある。それを抑えて生活している。この鶯餅の口の形は作者の心である。俳句でも否定精神がとても大事。

風花の横一列に生まれけり 平 恵

青空に舞う雪を風花、群馬県では吹越とよばれている。その風花がある瞬間、ばらばらではなく横一列になって青空から舞い降りてきた。人の生涯も、平等に横一列とも思える。作者のこの認識こそ尊し、と私は感銘。

その他の印象に残った句。

雪跳ねるヒマラヤ杉の木霊かな	川上みさ子
リハビリの吐息も言葉冬ぬくし	池崎 昌子
雪の夜の青一面の世界かな	森井美恵子
さざ波を越え来る波や風光る	渡辺 扇大
星団を仰ぎ死にゆく寒鴉かな	加藤 浩二
切絵図を体よぢらせ見る日永	吉川 孝子
古書街の知覧特攻リラの花	菊地 雅子
大寒や絵馬の重なりただならず	石井 節子
銭湯の硬き煙突二月尽	桜田 花音
被災者の目と紀信の目春浅し	小田桐妙女
あちらこちら白のマスクの不信任	正木かおる

東京句会報

小川葉子記

〔中村主宰の講評及び選評〕

二月二十五日 二十名

二十日に金子兜太が亡くなった。西行を始め芭蕉・一茶・子規・楸邨・兜太と並び、生きて、歩いて歌や句に表出した一生涯。俳人だけでなく、一般の人にも広く知られる。九十代に入ってから戦争反対と安倍政治に物申すと行動し、駿河台公園には千人くらいの人が兜太の話を聴きに來ていた。

金子兜太先生を悼む 中村和弘抄出

木曾のなあ木曾の炭馬並び糞る  
 魚雷の丸胴蜥蜴這い廻りて去りぬ  
 水脈の果て炎天の墓碑を置きてさる  
 朝日けふる手中の蚕妻に 示す  
 墓地も焼け跡蟬肉片のごと樹樹に  
 暗闇の下山くちびるをぶ厚くし  
 朝はじまる海へ突込む鷗の死  
 湾曲し火傷し爆心地のマラソン  
 霧の村石を放うらば父母散らん  
 人体冷えて東北白い花盛り

⑩ ⑨ ⑧ ⑦ ⑥ ⑤ ④ ③ ② ①

① 梅咲いて庭中に青鮫が來ている  
 どとどとと 螢袋に蟻騒ぐぞ  
 冬眠の蝮のほかは寝息なし ⑬

② 十代の句。楸邨が褒めた。

③ 二十代の句。学徒動員され望郷的。

④ 多数の非業の死者への想い。

⑤ 塩谷みな子との新婚の句。

⑥ 「蟬肉片のごと」が生々しい。

⑦ 「くちびるをぶ厚くし」が流行った。

⑧ 「海へ突込む」は飛行機が突込むに通じる。

⑨ 青春の反抗。

⑩ 梅、桃、桜が一斉に咲く東北。

⑪ 季節感と想像力の句。鮫の化石が出土する地において、出雲風土記の鰐鮫か。

⑬ この句以降に佳い句が沢山作られた。

特 兜太逝く金の柳の芽吹きあり 葉子

特 兜太は非常に繊細で、後に野性味が出て來て剛直になった。故につかず離れずの句。

特 桜東風ただの漢の優先席 葉子

ちよつと皮肉。人間の差別に対する句。

特 月蝕の疼くふゆぞら初潮くる 嘉子

自然と人間の営み。「月蝕」と「初潮」がつくか。人体も自然の一部である。

特 私庭のままの道筋ならん縁蓐梅 明虫

ちよつとリズムが悪いが季語も面白い。

特 厩の藁ていねいに敷き卒業す カツ子

「厩の藁」と「卒業す」がややつくが、しつかりできている。

特 じやが薯の芽マグマ溜りの土壘く 七穗

アンデス原産のじやが芋は原産地では二千種ほどある。火山灰土は薯が良く育つ。

特 目出し帽突つ立つている飛雪かな 征市郎

眼だけ出した人間の存在を感じた。

特 啓蟄やダム放水口の開く頃 孝子

黒四ダムなど放水の進りが見事で啓蟄の頃。

特 歌声は小学校の桜から 雅子

シンプルで材料が揃い過ぎたかな。桜が歌っているようでもある。

俳句は内容。その人独自の深さを持つてることが大事。一茶も子規も、駄作も多い。また山頭火はつまらないが、句は独自性を持っている。兜太は俳句というより肉声だ。

佳 蛇穴を出て鉄橋のひびきけり 正子

陸・各地俳句会動向欄

佳 啓蛰や鎌の楔を締めにけり 正子  
 佳 五郎太石音引き合ふて雪解川 〃  
 佳 もの芽の音たて生まれ兜太なし 嘉子  
 佳 余寒なお花舗の鏡に妣がいる 〃  
 佳 ホーローに疵の始まり猫の恋 アイ子  
 佳 きさらぎや杵の反り深き艶を持つ 〃  
 佳 末黒野に白きは時向かふ道 孝子  
 佳 江田島の真碧に群るる針魚かな 〃  
 佳 スカイツリー揺れて巻りし寒さかな 悦子  
 佳 修道尼の耳朱く透け春雷す 信子  
 佳 錆色の材木店や燕来る カツ子  
 佳 花炭の美しく弾けし数寄屋かな 征市郎  
 〈その他の高点句と主宰の句〉  
 二二月に忌日ふやして兜太逝く あや子  
 寒鰯に北方四島刺さりおり 和弘  
 サイレンのように子が哭き涅槃西風 〃  
 立春の乳酸菌の蠢立てり 〃

河口二月例会報 鎌田史子記

宿題「水仙」  
 水仙に一札したる茶の湯かな 明子  
 水仙のドアの向うで家族葬 遊白

此岸俳句会報 田中三桃記

二月二十四日 弘前市民参画センター  
 宿題「早春」

水仙花「アンネの日記」読む少女 ひろし  
 剃刀と鏡の奥の水仙花 彰  
 水に映ゆ我が身に見惚れる水仙花 恵  
 水仙の花に隠れし少女の目 万華  
 水仙を買いきて句作試みる 嘉津子  
 水仙のすつくと立ちて向き勝手 鷹を  
 当季雑詠  
 啓蛰や津軽ぬけ出す切符買う 史子  
 北国の二月の空に愛想なし 雨苑  
 往く人の棒になりたる寒波かな ひろし  
 追憶の雪とめどなく舞い降りぬ 雨溪  
 大寒波ガバリ飲み込む日本地図 恵  
 川イルカゆるりと春の波に入る 鷹を  
 書き順を迷う漢字や日短かし 嘉津子  
 鬼は父吾子の豆撒き福を呼ぶ 寿明

早春や青鮫連れて兜太逝く 限  
 早春や玻璃に少しの砂埃 恵美子  
 早春の海千畳のやすらぎぬ 星津女

早春の小川も堰もビバルデイ 乃の子  
 早春賦万年筆の滑らかに 三桃  
 水色に青すこし足して早春 響史  
 早春のひかりを浴びる窪の底 冬道  
 早春の稜線ののち匂ひ立つ 花音  
 早春のステップジャンプ年金日 秋遊子  
 早春の街のにほひにふと気付く 棒  
 干し餅に早春の色青朱黄 顔回  
 百円パスに園児のうたごえ春早し 子星  
 列島を駆く早春の荒凡夫の訃 美正子  
 早春の光を受けて人と逢ふ 月萌  
 早春やおしろいつけるニキビ痕 摩季  
 早春の陽射しに醒むるりんご園 青竜  
 早春や餅屋の餅のうすみどり 遊白  
 早春や病む友ひとり会ひに来る 五香女  
 早春や変声期中の美少年 湖愛  
 そのままに岸辺のベンチ春早し 青羽  
 早春の八甲田丸戦ぎけり 桐妙女  
 早春やモーツァルトのような朝 唯央  
 早春や断捨離少しははかどりて 真乃  
 早春やブラウス白き女学生 りま  
 早春の溶ける匂ひや水面立つ 詩織  
 早春の淡き色たち金平糖 とまと



早春をそつとぬけだす隠れん坊 大久  
早春の空に飛べフォーティンフォーティ 山楨子  
早春や見なれた街の他郷めく 風信子

蒼鹿句会報

二月二十二日 仙台市太白市民センター  
席題「春の泥・酒」より一句  
昼酒の酔ひで跨ぐや春の泥 茂樹  
仏にも酒を切らさず春の月 眞規子  
豪雪に「酒」一文字の屋台かな 協三  
春泥を首まではねて当歳駒 光秋  
酒蔵の白壁にある余寒かな 仁  
郷よりの到来野菜に春の泥 昌子  
今宵こそ乙女に還る雛の酒 寿子  
春の泥鳥の足跡五つ六つ 正行

当季雑詠

寒晴の芯となりたる球タンク 茂樹  
愛しみて老幹たたく雨水の日 眞規子  
寒林や汽車は蒸気も裾に吐き 協三  
春寒や理髪店前白き椅子 仁  
観音の肩すべり消ゆ春の雪 光秋  
連翹の花に濃淡里の朝 昌子

糺俳句会報

二月 北押原公民館  
若きらの名を聞き返す春法事 ミイ子  
夫好む茶菓子用意す春の雨 〃  
小雨降る白まばらなり冬の山 久子  
一言の願を胸に初詣 〃  
正月やままごとの如箱膳に 都  
冬の雨背中にせおいし赤子かな 〃  
鏡餅くだかれ揚げておやつなり 善昭  
仏壇に雑煮そなえて年初め 〃  
一村に腰降ろしたる雪の雲 京司  
冬木立途切れて雨の音を聴く 〃

おしぬま句会報 石川真木子 記

二月八日 代沢地区会館  
句会会場から徒歩十分ほどの淡島神社で、  
針供養が行われるとの情報で、急遽ミニ吟行  
となり、句会は後回しにして皆んなで行って

きました。初めての針供養に、興味津々。久  
しぶりの吟行、大成功でした。

針供養折れし心も刺しにけり 達治

広辞苑ほどの豆腐や針供養 嘉子

閻魔堂和女のさざめく針供養 克

しつけ糸とらぬ衣あり針供養 明子

針供養傷める程の針持たず 君子

針供養母の形見もその中へ 信子

連れ立ちて読経流れる針供養 ふみ子

運針の布黄ばみゆく針供養 洋子

幼稚園の声塀を越え針供養 真木子

句会

冬の桜幹に輪廻の音がする 嘉子

一揆村飢えの田畑の霜柱 克

荆妻を聖観音と称ふ春 達治

ねむごろに返信書きぬ正月 玲子

初糺や魚が目を剥く鱸上げる 君子

囀りのたえまなく降る螺旋階 信子

夫委ねし病棟臭う余寒かな あや子

大の字の海星にはしやく冬の浜 ふみ子

冬籠り尋ぬることを簡条書 洋子

しずり雪一喝の如く肩に受く 明子

椿落つ音鳴りやまぬ食洗機 初子

豆撒きやすすべての窓を開け放ち  
マンモグラフィの乳腺絡み雪催

めぐみ  
真木子

空吟行句会報

小竹ヒサ子記

二月三日 日本橋界限

特 化学が働き劣貨輝く虎落笛  
特 保管さるる偽貨はきれいや寒戻る  
特 寒の水一杯飲みて家を出る  
特 錦絵に造幣局の桜かな  
特 待春の紙幣にすかし文字見ゆる  
特 子供銀行出れば吾にも鬼の豆  
並 銅銭の四角い穴を恵方とす  
並 アルミ貨の影うすくあり冬の鳥  
並 豆まきせず二人静かな日となりぬ  
並 節分の壽司一切りて歩く大道ありし  
並 きららなる金貨の薄さ春おぼろ  
並 春闈けて千両箱の小ささよ  
並 柱より手出で足出で春立てり  
並 金箔で覆ふ巻鮎牙え返る  
並 如月や拾圓札の青味濃し  
並 文化文政絵巻の隅に二羽の鷹  
並 乙姫の光背は魚春立ちぬ

明虫  
悦子  
ヒサ子  
禎子  
葉子  
アイ子  
悦子  
葉子  
よし江  
ヒサ子  
禎子  
カツ子

よこはま句会報 猪狩鳳保記

二月四日 横浜フオーラム

手の先を縛りしやうに牡蠣を剥く  
わが性は洗いい熊なり春立てり  
ペンギンの黄の嘴映える雪散歩  
雪景色久し振りだよ畑真白  
霜柱思つたよりも深く立ち  
長閑さや白き客船島のごと  
首輪なきブータンの犬春の泥  
休火山凹の底の根雪かな  
豆撒の鬼に聞こえぬような声  
祝電を宙にちりばめ牡丹雪  
立春や水海砕く船の音  
包丁の柄にひび入る寒波かな  
鬼やらひしたる手の甲老いてゆく

明虫  
あや子  
岳栄  
幸南  
たかし  
不遜  
鳳保  
雅代  
みどり  
詳恵  
良和  
頼江  
雄鬼

『茅』例会報 加藤浩二記

二月十日 ネスバ茅ヶ崎ビル

雪もへりも降らず茅ヶ崎よかところ  
踊り場に光と陰や二月尽

喧嘩  
卓三

月蝕の始まりて息凍てはじめ  
学芸会その他おおせい犬ふぐり  
帰るさに形見を浜に雁の妻  
腕ふらぬ忍者走りや春の風  
一針に母の手のなる春裕  
聖母逝き苦海浄土に梅香る  
天を蹴る吾子の手足や桜草  
ノラやいづこ春立つけふの猫会議  
駅伝の足音残るや春浅し

和子  
詳恵  
浩二  
たか子  
陽子  
芳郎  
みちこ  
昇  
光子

『茅』研究句会報 加藤浩二記

二月十八日 ネスバ茅ヶ崎ビル

兼題「子・守・歌」より一句、雑詠一句  
雁風呂や酒は男の子守唄  
春の闇心音ゆくりなく穏和  
頭から目刺しを食ふて聖職者  
歌い継ぐアラン悲し二月尽  
抽出しの古母手帳かたかこの花  
薄水やこわれやすきは美青年  
遠野火や風に舞ひたる相聞歌  
老夫婦スマホに苦戦春炬燵  
深更に子守唄なる虎落笛

喧嘩  
和子  
卓三  
たか子  
七穂  
詳恵  
浩二  
陽子  
芳郎

豊の目かぞへておはす古雛 昇  
 春風やゆりかごに似た雲ひとつ 美智留  
 白梅や背もたれ立ててあげようか 麻礼  
 折り紙の四角三角一輪草 光子  
 守るべき友に守られ雪深し

鳥語俳句会報 中村 穂記

二月十八日 ウィンクあいち

ふくろふの目がまん丸や大ジャンプ 仿湖  
 春光を握つて児らの土団子 隆子  
 湖荒れて女形銜へる紅椿 ていこ  
 牙返る自縄自縛の不眠症 五山子  
 ゲルニカの陶面に触れり牙返る 千枝  
 落款の位置定まりて雛の額 さちよ  
 春近し児に出す文にるびを打ち よし子  
 まんざくや友を待ちたるちらし寿司 真小児  
 悴める手に合はざりし札の数 紀洛  
 雪しまく航路に積もることのなく さちよ  
 フランスパン担ぎて帰る春の星 和歌子  
 鉄階を弾まし掃きぬ鬼の豆 夕海  
 窓越しの立春寒気飴しやぶる 雅代  
 春の雪黒く透けたるビルの街 亨子

ガン治療の友の横顔春浅し 和子  
 チョコレート贈られ贈る二月かな 靖子  
 今年をば人籠らせる余寒あり つや子  
 立春の三半規管水の音 穂

百千鳥俳句会報 中村 穂記

二月十日 長円寺会館

兼題「棒」・当季雑詠

指揮棒の先から春が生まれてる 仿湖  
 棒切れを持つこともなし春の川 五山子  
 冬満月映る地球の影赤し 啓子  
 コロッケの湯気を頬張る四温かな 弘子  
 白魚井ふはふはふはの卵綴ち 清美  
 摘草や土手を下りれば渡し舟 土龍  
 寒明けてぶつきら棒に笑みもどる 文子  
 絶え間なく動く編棒風花す 和歌子  
 麻痺の手に零れるほどの追雛豆 千枝  
 細めにと頼まれ巻きぬ患方巻 祐子  
 蠟梅の透ける花びら空近し 百合子  
 灯をともし産科病棟春隣 穂

序曲句会報 杉山鮎水記

二月十四日 宝塚山本 大島事務所

表札の一字薄れて寒明くる 栄子  
 荒星や月と連れ立ち隠れけり 淡紅子  
 妻埋めし土域に感ず春の息 鮎水  
 蠟梅の盛んに咲きし空家かな 恵之輔  
 句評▽栄子：中七「盛んに」と「咲きし」とは語意が重複していて勿体ないので、ここを節約した方がよい。

大根の青首の列学級園 峯子  
 若布売り語尾のあがりし浜言葉 栄子  
 句評▽鮎水：方言を教わるのに興味がある。  
 掲句の作者は先頃徳島へ行かれたそう、関連句からも浜近辺の市場か露店を通りがかったのであろう。地方の生活状況が知れ、情景が想像できて楽しい句。

○探梅や小鳥捉えし双眼鏡 峯子  
 梅の花巫女残しゆく箒の目 栄子  
 句評▽麗子：「梅の花」で静かで綺麗な観察句。神道の品性も感じます。

○印が最高点句 六句投 六句選

平成30年4月20日

各 位

現代俳句協会

会 長 中村 和弘

特別顧問 発起人代表 宮坂 静生

## 金子兜太先生お別れ会のお知らせ

去る2月20日（火）に逝去した当協会名誉会長（第3代会長）金子兜太先生お別れ会を、下記の通り行ないますので、謹んでお知らせ致します。

### 記

1. 日 時：平成30年6月22日（金）12：00～13：30
2. 場 所：有楽町朝日ホール  
（千代田区有楽町2-5-1 有楽町マリオン11階）
3. 形 式：無宗教による献花拝礼
4. 喪 主：金子 眞土氏（長男）
5. 発 起 人：宮坂 静生（代表）、宇多 喜代子、中村 和弘、  
寺井 谷子、高野 ムツオ、伊藤 政美  
安西 篤、武田 伸一  
黒田 杏子  
海程会、件（くだん）の会  
現代俳句協会

（備考） 服装は、平服と致します。

なお、香奠、供物、供花の類につきましては、  
固くご辞退申し上げます。

以上

お問い合わせ先 現代俳句協会事務局（電話03-3839-8190）

## 編集後記

「昔の国の境と大名の配置 寛文四年」が黄ばんだ「日本地図」の左肩にあるロマン。

「ワイド日本全図」では「首都圏と近畿・東海」の現在が配されている。その下に走り回っていた庭から室内に居を移した老柴犬がいる。

浪漫と現実のリビングである。この春は東京も北国のように一斉に花が咲いた。四月半ばというのに、ゴールデンウィークに見頃の本香薷薇と難波茨の垣が満開である。三月の現俳の総会では、上野の桜がほぼ満開だった。中村主宰の会長就任を言祝ぐような、丁度良い、咲き具合であった。

(葉子)

今回の校正作業は、いろいろな事情が重なり、いつもとは違う状況で行いました。そのことが何か誌面に影響を及ぼしていないか、少し

心配しています。仕事でも、要注意の三日があると上司に言われました。「初めて、変更、久しぶり」の三つです。新年度は特に多くなりそうな場面、皆さん気をつけましょう。(陽子)

今月号は、金子兜太先生の追悼特集、テーマを詠む「日本」、そして今月号からスタートした吉本のおごさんによる「今月の秀句十句」と盛りだくさんとなりました。また、中村和弘主宰が現代俳句協会会長、そして瀬間さんが現代俳句新人賞選考委員に就任し、私が現俳協の事業部長になってしまいました。私の方の役目としては、まずは四十一ページに掲載しました現代俳句講座を行うことです。陸の方々にも多くの方にご参加いただき、現代俳句協会も盛り上げていただければ幸いです。(雄鬼)

陸 第四十六巻 五月号

平成三十年四月二十日印刷

平成三十年五月一日発行

発行人 中村和弘

発行所 陸 俳句会

東京都板橋区志村二丁目一六二番三

電話〇三三五五八二八〇九

振替〇〇一九〇一七一七八〇一九

編集部 大石 雄鬼

東京都府中市幸町三丁目一四三五

電話〇四二二三六四一〇一〇四

〒183-0054 〒174-0056

### 購読料

一部 一、〇〇〇円  
半年分 六、〇〇〇円  
一年分 一一、〇〇〇円  
送金は必ず発行所宛にお願  
いいたします。綴じ込みの  
振替用紙を利用されるのが  
確実で便利です。

昭和四十九年六月十七日第三種郵便物認可

平成三年五月一日発刊（毎月一回）日誌了  
通巻五三八号

# 陸 RIKU

第四十六卷  
第五号

価  
二〇〇〇円

